

新古改撰誌記

卷之六

(朱書)
「四百拾三」

嘉永五子年正月廿一日御用所田中勘左衛門より差越

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭

線姫君様来月廿一日山王 江 御参詣、帰御之節 西丸御広敷 江

御立寄可被遊旨被 仰出候事

子正月廿一日

三宅市右衛門
長谷川甚兵衛

同年二月四日御用所田中勘左衛門より差越

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠頭

来ル廿一日 線姫君様山王 江 御参詣 帰御之節 西丸御広

敷江 御立寄二付、御供并山王・西丸御先勤人数之義、前々 姫
君様山王 御参詣之節之振合ニ相心得人数書早々可差出候事

子二月

三宅市右衛門
長谷川甚兵衛

同年二月 日当番所筑紫弥太六より差越

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠頭

線姫君様山王 御参詣之節御先勤并御供之面々江吸物・御酒被

下之 御目 見以下者御酒・御肴被下候事

一、寺社奉行・御留守居者芙蓉之間、其外布衣以上御役人者菊之間、

御目 見以上者柳之間・蘇鉄之間 御目 見以下末々軽キ者共

江者元御勘定所前御廊下・御台所ニ而被下候事

一、西丸御広敷 御立寄中、同所御先勤并御供之面々江者於同所も

御酒其外 御本丸同様被下候、尤席々之儀者、坂下御門内ニ而

開キ候御供之分者西丸御春屋内於扣所被下、其外之面々江者於

西丸御台所被下候事

一、吸物・御酒頂戴之面々御礼之儀者大目付謁候筈ニ候事

一、山王御先勤并 西丸御先勤且御供之面々江御賦被下候事

右之通被仰渡候事

二月

三宅市右衛門
長谷川甚兵衛

同年二月十八日

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭

来ル廿一日 線姫君様山王 御参詣之節、御供并山王 西丸
御先勤共熨斗目半袴着用いたし、御供縊股立足袋相用候、尤御
小人者役羽織着用之事

一、御供之面々召連候侍同勢江相立候ニ付、服紗小袖麻上下着用い
たし、徒之もの者羽織袴為着候事

一、御供惣同勢之儀者一ツ橋御門外御堀端ニ差置、御供附引連山王
ニ被為 入候内者松平美濃守・松平伯耆守屋敷脇通りニ差置、

帰御之節者右場所より御供ニ附 西丸御広敷江被為 入候ハ、
銘々主人退散之場所江為相廻り可申候、尤御徒押・御小人押差
引いたし候事

一、山王御先勤同勢之分、土井大隅守屋敷前より松平出羽守屋敷脇
通りニ差置候事

一、西丸御先勤同勢之分者備前守殿屋敷後口通りニ差置候事

一、服機改之儀者奥向・御広敷向計り相改、尤御供并御先勤御道筋
江罷出候者者相改可申候、山王より 帰御之節より不及相改候
事

一、御当日殿中平服之事

一、御途中ニ而雨降候節、傘 御免被遊候ハ、御先・御供者御広敷番
之頭差引仕、御徒目付・御小人目付より相渡候事

一、帰御之節 西丸御広敷 御立寄中坂下御門外ニ而開キ候御徒頭

・組とも 西丸御広敷江被為 入候ハ、直ニ引取、御酒其外被

下候儀者 御本丸席々於被下置候事

右之通被仰渡候事

二月十八日

三宅市右衛門
長谷川甚兵衛

御中間頭江
御小人頭

来ル廿一日 線姫君様山王 御参詣之節 御城内 通御之御
門々々当番之頭平伏罷出、并与力・同心見計引下り平伏之事

一、御道筋御門之者熨斗目麻上下、御小人者役羽織着用之事

一、当日殿中平服之事

一、服機改之儀者奥向・御広敷向計り相改、尤御道筋江罷出候者者相改
可申候、山王 帰御之節より不及相改候事

右之通伺相濟候間、依之申達候事

二月

三宅市右衛門
長谷川甚兵衛

御道筋

御広敷より御裏御門 上梅林坂御門 下梅林坂御門 平川口御

門 竹橋御門 吹上 上覽所前通り、半蔵御門外左江御堀端

通り三宅对馬守屋敷脇井伊掃部頭屋敷後口通り、細川山城守屋

敷前脇左江岡野大学頭屋敷前脇・松平筑後守屋敷前脇、井伊掃

部頭屋敷脇前右江御堀端通り、外桜田御門・坂下御門より西丸

御広敷江 御立寄 帰御御同所御裏御門より蓮池御門通り、二

丸銅御門・汐見坂御門通り 御本丸御広敷江
右之通当番所稻垣藤一郎相達ス

同年二月十七日玄蕃頭殿御渡、孫太夫殿御達

線姫君様山王 御参詣ニ付御取建物いたし候間、今十七日よ
り諸参詣不相成候事

二月十七日

(朱書)
「四百拾四」

同年正月廿八日右京亮殿御渡御達書御徒押より来ル、五役承附い
たし当番所江返却

西丸御目付江

例年十一月十二日増上寺 広大院様 御霊前并 御廟所江

右大将様 御参詣之節 御廟所より 御装束所江被為 入御

道筋、向後御内道通り

有章院様 勅額門前 御成御門より 御装束所江被為 入候間
惇信院様

可被得其意候

但シ二月十日 広大院様 御霊前江 御参詣之節も本文之

通御内道通り 御装束所江被為 入候事

右之通向々江可被達候

子正月

同年二月 日西丸当番所増田昌三郎より差越、絵図面兩組頭江為
留置承附返却

御中間頭江
御小人頭江

例年十一月十二日増上寺 広大院様 御霊前 御廟所江

右大将様被遊 御参詣候節 御廟所より 御装束所江被為 入

候節御道筋、向後御内道筋 御装束所江被為 入候ニ付 御参

詣之節 御霊前 御廟所御供開場・建場之儀者前々 御参詣之

節之通り相心得、山門外ニ而開候御供者

有章院様 御霊前脇 御成御門外江相廻り候ニ付、御供開場并

惇信院様

御装束所江被為 入候節御供開場之儀者別紙絵図面之通り

二候事

一、二月十日 広大院様 御霊前江 御参詣之節も御内道通り

御装束所江被為 入候ニ付、御供建場・開場之義是又前条之通

ニ可相心得候事

但絵図面可致返却候事

右之通伺相濟候事

二月

松平上野介

(朱書)
「四百拾五」

同年四月廿日御部屋久有を以御当番江差出ス

覚

無役世話役
壹人

右者明廿一日浅草筋江

公方様 御成被 仰出候処、私共儀者 御本丸御供并詰番相
右大将様

心得者人者当時差合中ニ付 右大将様御供之方不足仕候間書
面之通御雇仕度奉存候、御徒目付組頭江被仰渡可被下候、以上

四月廿日

御中間頭

杉野甚平
松永定作

〔朱書〕
〔四百拾六〕

同年五月十日主膳正殿被仰渡候段、四郎左衛門殿立合金四郎殿被
申渡、御書取緒附返上

覚

御中間
御小人
御駕籠之者

右者二月廿七日船堀筋江 御成之節風雪之処格別骨折相動候ニ
付、別段為御手当金貳拾兩被下之

〔朱書〕
〔四百拾七 四百十九と組〕

同年五月廿二日大学殿御達

御掃除出来次第 右大将様 二丸江 御逼留被 仰出候、御道

筋之儀者、御風呂屋口より汐見坂御門より二丸御風呂屋口通り被
為 入候事

五月廿二日

同年五月廿八日伊勢守殿御渡一学殿御達、当番所浅井七三郎相達

ス

一、六月二日 右大将様 二丸江 御逼留被為 入候段被 仰出
候間、向々江可被達候

五月廿八日

御中間頭江
御小人頭

右大将様二丸 御逼留中、御同所御長屋御門・御番所脇御長屋
御門・新御門共御夜詰引ニ而締可申候事

一、御両卿方二丸御風呂屋口より御登 城有之候ニ付、新規出来之
御風呂屋口御門通行相成候間、御差支無之様可取計候事

子五月

戸川中務少輔
松平上野介

同年五月廿九日当番所浅沼三郎兵衛相達ス

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

右大将様二丸 御逼留中西丸勤之向者二丸江勤番可致旨、尤役々
ニより西丸江も相詰泊り可申旨主膳正殿伺相濟申候、依之申達候
事

五月

戸川中務少輔
松平上野介

御徒目付組頭
西丸御徒目付組頭 江

右大將様二丸江 御逗留被為 入候節御道筋、御風呂屋口より
汐見坂御門通二丸御風呂屋口江被為 成
一、御供方衣服之儀平服之積り、且御行列之儀者是迄 御本丸江
御定日 御成之通ニ而御供建・開等之儀者前々二丸 御成之
節之通りニ候事

御注進

一、御道具出候由 二丸江
一、御駕籠出被為 召候由 同断
一、二丸江被為 入候由 御本丸江
右之通主膳正殿伺相濟候間申達候事

五月

戸川中務少輔
松平上野介

右大將様二丸江 御逗留被仰出候得共、御礼事等都而最前相達
候通り可被心得候

右之通向々江可被達候

五月

(朱書)
「四百十八」

同年五月九日

御徒目付組頭江

明後十一日竹橋御藏地江被為 成大筒被遊 上覽、夫より浜町
清水屋敷御通抜之節 御道筋、西桔橋より矢来御門・竹橋御藏
地江被為 成候、御先御供之儀者竹橋御門之方江行越相開キ、
御跡御供之儀者御藏地御門外ニ而相開キ可申候、尤御藏地之内江
者奥向御供計ニ而被為 成候

一、御藏地内ニ被為 在候内者御門建置、御筒 上覽相濟御藏地
還御之節者奥向より左右次第御門開キ候、開閉之儀者伊賀者
相勤候事

一、御藏地外廻り之儀者御徒御固メいたし候事

一、御先勤同勢之儀者田安御門辺江差置候事

御成御注進 御小入方

一、御駕籠被為 召候由

竹橋御門・清水御門御注進ニ付当番之主人御番所江相詰、両番

共病氣ニ候ハ、御徒目付相詰候事

右之通伺相濟候事

五月九日

戸川中務少輔

(朱書)
「四百十九 四百十七と組」

同年六月二日西丸御徒目付組頭岸本誠一郎相達ス

一、右大將様二丸 御逗留中人数茂増御仮建物等多く有之候ニ付、
諸役人を始末々ニ至迄部屋々々江取締向、且火之元精々入念候
様向々江不洩様可申渡旨右京亮殿被仰渡候、依之申達候、以上

六月二日

松下大学

(朱書)
「四百式拾」

同年六月廿六日二丸当番所より差越、承附いたし返却

御中間頭江
御小人頭

火消道具之内焼失之品又者損シ等相改委細可申聞候、支配向御番所江相渡置候分とも取調可申聞候事

六月廿六日

松平上野介

(朱書)
「四百式拾壹」

同年十一月十日左之巻通并絵図面式枚相添西丸当番所組頭岸本誠一郎名面ニ而御徒押より廻し来ル、奉書・絵図面共中小組頭江為心得留不申候

御徒目付組頭江

明後十二日増上寺 広大院様 御霊前 御廟所江 右大将様被遊 御参詣御道筋之儀者、二丸御玄関より銅御門・内桜田御門・西丸大手御門前、御供建場・開場之儀者別紙絵図面之通ニ候事

一、御注進附人等之儀者前々之通ニ而、西丸大手御門之廉を以内桜田御門御先可申込事

但御貝役・御太鞍役・御徒押・五役之頭江も可相達候事

子十一月十日

松下大学

(朱書)
「四百式」

嘉永六丑年五月四日芸術掛御徒目付松本礼助より達ス

黒鍬之者頭
御掃除之者頭江
御中間頭
御小人頭

水戸一刀流
一、劔術

御中間目付見習

大原道藏

丑三十一歳

足立鉄平組

御小人

内川元蔵

同三十五歳

神道流

一、劔術

一、居合

一、薙刀

黒鍬之者

式人

御掃除之者

壱人

右者近々於植溜若年寄衆武術御見分有之候ニ付、当時病氣差合、名改・歳附其外相替儀無之御見分罷出候哉

一、打太刀ニ罷出候者 御目 見以上小普請又者次男・三男・厄

介且陪臣・浪人ニ而も罷出不苦候、尤 御目 見以下上下格倅・

厄介并役上下番人者平服、其外者麻上下着用之事

但打太刀之者当朝俄煩等ニ候ハ、御見分罷出候者内同流之も

の相互に致打太刀不苦候

一、極秘之業いたし候ハ、其段可申聞候、道具等之儀者有合相用新規出来ニ不及候事

一、先年御見分相濟拝領物有之候ハ、其廉有無共可申聞候
一、時宜ニ寄御好等も有之候間、一術ニ而一業ツ、可罷出候

右之通相心得打太刀姓名書相添、明後朝迄下ケ札を以可申聞候、
以上

五月四日

戸川中務少輔
鵜殿甚左衛門

下ケ札

御書面組御中間目付見習大原道藏、病氣差合・名改・歳

附其外相替儀無御座、御見分之節罷出候

一、打太刀、小十人頭宮崎次郎太夫惣領同富次郎罷出申候

一、是迄御見分罷出不申候

一、時宜寄御好等茂有之候節者試合仕候

御中間頭

伊藤次兵衛

五月

同年五月十三日御部屋孝益を以差出ス

覚

伊藤次兵衛組

御中間目付見習

大原道藏

足立鉄平組

御小人

内川元藏

武藤金五郎組

黒鋏之者

山崎又十郎

近藤勝平組

同断

山崎梅吉

杉野甚平組

御掃除之者

北岡建三郎

右之者共儀昨十二日於植溜若年寄衆武術御見分無滞相濟、銀子頂
戴仕候旨申聞候、此段申上候、以上

五月十三日

黒鋏之者頭
武藤金五郎
近藤勝平

御掃除之者頭

杉野甚平

御中間頭

伊藤次兵衛

御小人頭

足立鉄平

(朱書)

一四〇廿三

同年六月七日式通御当番江差出ス

御徒目付

五人

御小人目付

拾人

御使之者

拾人

右者此度御用多ニ付今七日より当分之内増泊り仕候、此段申上

置候、以上

六月

御目付

御徒目付

五人

御小人目付

拾人

御使之者

拾人

右者御用多ニ付罷出候間、夕御台所御湯漬引候様御賄方江御断可被下候、以上

六月

笠原新左衛門

右之通当番所ニ而相達候段同人申聞候、尤以来共同所ニ而日々取扱候様是又申聞候

同年六月七日御小人目付・御使之者増泊り被仰渡候ニ付、右両部屋手狭ニ付御玄関前御多門続仮部屋仕度旨六蔵・助左衛門申出候間、書面左之通認メ差出ス

御作事奉行衆

覚

御中間目付
御小人目付

拾人

御使之者

拾人

右者此度御用多ニ付今七日より当分之内増泊り番仕候間、御小人目付・御使之者部屋手狭ニ付、御玄関前御多門続御細工方持場所仮部屋ニ取建受取申度、尤前々御用之節請取候先例も御座候ニ付、此段御作事方江御断可被下候

右之通御中間頭・御小人頭申聞候間此段御達申候、以上

六月七日

荒尾土佐守

一、御小人目付増泊りニ付、御用方より三人当番方ニ而七人泊り相勤候段世話役彦七郎申聞候事

同年六月十四日御扣共式通御部屋良格を以差出ス

御作事奉行衆

覚

御中間目付
御小人目付

拾人

御使之者

拾人

右者此度御用多ニ付去ル七日より御玄関前御多門続之場所請取増泊り勤番仕候処、御用相濟候ニ付、此段御作事方江御断返し可被下候

右之通御中間頭・御小人頭申聞候ニ付此段御達申候、以上

六月

荒尾土佐守

同年六月十七日

御徒目付

五人

御小人目付

拾人

御使之者

拾人

右御用多ニ付去ル七日より増泊り被申付候処、御用相濟候間断返し之旨当番所御徒目付より達有之候段、御使組頭弥十郎申聞候

一、右ニ付増泊り致し候者仮詰所、今日御作事方役々江引渡候旨同人申聞候

一、西丸御用ニ付去ル七日より増泊り致し候同所御小人目付・御使
之者、御用相濟候に付断返し之旨、柴崎伝十郎より御使を以申
聞候

(朱書)
「四百廿四」

同年六月十一日

一、異国船内海江乗入非常之場合ニ至候節 御城外江被為 成候
儀も可有之候間、御供方差支無之様鶉殿甚左衛門殿御達し之段
当番所渥美又兵衛相達ス、但早半鐘打驅附之上之儀故差支無之
旨及答候間、御心得有之候様存候、御供組頭江も達申候

覚

御馬牽人

諏訪部八十郎方御厩 拾人

同断

村松四兵衛方

六人

同断

(見脱之)
竊七左衛門方

三人

同断

曲木仙之助方

三人

右者此度御用ニ付書面之箇所々々御厩江日々昼夜相詰候様、御
中間頭中江御断被仰渡可被下候、以上

六月

曲木仙之助
竊見七左衛門
諏訪部八十郎
村松四兵衛

右書面甚左衛門殿より御用所田中勘左衛門を以御下ケ有之候間、
其段御供組頭江申渡御厩向江為掛合差遣申候、然ル所後刻甚左衛

門殿御沙汰之旨にて同人申聞候者、跡ニ而御扶持等相願候義も可有
之候節者、御厩向より進達之上御目付衆江扣下り候様同人申聞候、
其段組頭江為念御厩江右書面差戻候様談置申候

(朱書)
「四百廿五」

同年七月十七日安芸守殿御渡、四郎左衛門殿御達

公方様 御中暑ニ付為伺御機嫌、溜詰・同格御譜代衆・高家・
雁之間詰同嫡子・御奏者番同嫡子・菊之間縁頼詰・諸番頭・諸
物頭・布衣以上之御役人明十八日可有出仕候

一、病氣・幼少之面々者月番之老中江使者可差出候

一、右之外国持并万石以上之面々ニも月番之老中江使者可被差出候

一、在国・在邑之面々八月番之老中江飛札可被差越候

右之通可被相触候

七月

同年七月十九日安芸守殿御渡孫太夫殿御達、当番所渥美又兵衛相
達ス

公方様 御中暑御同様ニ而 御勝不被遊方ニ付為伺御機嫌、溜
詰・同格国持大名并庶流・御譜代衆・外様大名・高家・雁之間
詰同嫡子・御奏者番同嫡子・菊之間縁頼詰・交代寄合・表高家・
諸番頭・諸物頭・布衣以上之御役人明廿日四ツ時可有出仕候

一、病氣・幼少之面々者月番老中宅江使者可差越候

一、在国・在邑之面々者月番之老中江飛札可被差越候

右之通可被相触候

七月

同年七月廿一日安芸守殿御渡、十郎兵衛殿御達

公方様 御勝不被遊候ニ付為伺御機嫌、明廿二日四ツ時惣出仕之事

右之通可被相触候

七月

同年七月廿二日安芸守殿御渡、八郎左衛門殿御達

公方様 御不例御養生不被為叶、今已下刻

薨御被遊候、此段今日出仕無之面々江可被達候

七月廿二日

同日御同人御渡、御同人御達

公方様薨御ニ付今日より普請・鳴物停止ニ候事

右之通可被相触候

同日

七月

廿三日

惣出仕

廿四日

同

廿五日

万石以上之面々

右之通

右大将様為伺御機嫌出仕候様可被触候

七月

同日但馬守殿御渡、八郎左衛門殿御達

右大将様今日直ニ 御本丸江御引移之事ニ者候得共御差急之儀

ニ候間、両 御丸共得与御片付迄者折々西丸江も被為 入候筈ニ候、此段為心得今日出仕無之面々江可被達候

七月

同日御同人御渡御同人御達、当番所笠原新左衛門相達ス

黒鍬之者頭

御中間頭 江

御小人頭

一、御出棺迄之内万一急事之節御供立之儀者 御在世之時分 御

城内 御成之節御供立之通相心得、早速御玄関前江相揃西桔橋

江可相廻候事

七月

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

一、御出棺 御葬送并 御靈屋 御宝塔御遺物御用御法事、惣奉行

備前守殿

一、御出棺 御葬送并御遺物御用、安芸守殿 右御吹聴

一、御代替御用 御本丸・西丸御殿御取締 両御丸御人勤方御調御

用、伊勢守殿・但馬守殿、右御吹聴

一、御老中方・若年寄衆今日より御泊り、御夜詰引御門締り之儀者
是迄之通之旨、当番所組頭前同人相達ス

同日但馬守殿御渡、一学殿御達

右大将様御事今日より

上様与奉称候、弥以精勤を励可申旨被 仰出候段、今日出仕無
之面々江同席之面々より達候様可被相達候

七月

同年七月廿三日伊勢守殿御渡・一学殿御達、御用所掛権平持参三
役承附返却

此節普請停止ニ者候得共海岸御警衛筋之儀ニ付、差急候普請其
外製海物等之儀者相止ニ不及候間、此段向々江無急度可被達候事

七月廿三日

同年七月廿四日

御中間頭
御小人頭江
御駕籠頭

御出棺之節北桔橋江御供相廻り候儀者御刻限より半時早ニ相廻
り候事

一、万一途中ニ而雨降出候ハ、御供之面々江傘相渡候儀、御先御供
之分者一役者人宛相下り請取候様、小雨ニ而も候ハ、御供之拙
者共見計相渡候事

右之趣伺相濟申候、依之申達候事

七月廿四日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

同日

御中間頭江
御小人頭

御出棺御供之面々増上寺 御入棺 御葬送相濟退散之事、御
供建場矢来御門外、御先ニ而者三門外ニ而開キ候事

一、御供揃刻限 御出棺御刻限一時早ニ候事

但 御城相揃夫より北桔橋江相廻り候節、御供之同役引纏相廻

り候事

一、同勢者御刻限以前一橋御門外広場江集置、夫より御跡ニ付ケ申
候、御先ニ而者増上寺表門前海手大久保加賀守屋敷前辺ニ差置、
尤御徒押・御小人押差引いたし候事

一、御供御先勤并勤番之面々・又者者御賄被下候、且御法事中昼夜
相詰候面々朝夕夜共御賄被下候、尤御賄所貞松院・池徳院ニ而
被下候事

但方丈ニ部屋割有之候分者同所ニ而被下候事

一、北桔橋江相廻り候御供之面々、御刻限前迄之竹橋御門・清水御
門張番所集居可申候事

右之通伺相濟申候、依之申達候事

七月

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

御出棺御道筋

北桔橋より代官町通り、半蔵御門外左江井伊掃部頭屋敷脇通、松平市正屋敷前、上杉弾正大弼屋敷前右江板倉周防守屋敷前通新シ橋、夫より薬師堂前より左江松平隠岐守屋敷前通り、秋田安房守屋敷脇前松平陸奥守中屋敷脇より柴井町通、浜松町増上寺表門より龜前堂

同年七月廿四日安芸守殿御渡邦之輔殿御達、当番所組頭満田作内相達ス

公方様薨御ニ付増上寺 御入棺 御葬送被遊候、且又 御靈屋 御造立ニ不及 文昭院様 御靈屋 御相殿 御靈牌 御安置候様被 仰出候間、無急度寄々可被申達候

七月

諸願・諸同等只今迄紀伊守・西丸若年寄江差出候分、向後月番之老中・若年寄江差出候様向々江可被達候

七月

同年七月廿五日

安芸守殿

甚左衛門殿

七月

廿六日

万石以下

廿七日

御三家・溜詰
同格御譜代衆

廿八日

外様万石以上

廿九日

八月

朔日

右之通為伺御機嫌出仕候様可被相触候

七月

今度増上寺江相詰候面々、家来等迄作法宜仕候様可申付候、火之元別而入念可申付候

但家来共猥ニ不致他行様主人より可申付候

一、宿坊江為見舞他人者不申及、縦親類たり共昼夜共罷越候儀者有之間敷候、近キ親類若無抛子細有之罷越候とも、馳走ケ間敷儀一切致し間敷候事

但療治請候医師呼寄候儀者可為勝手次第候事

一、御用之儀有之出会者本堂之内相渡候部屋ニ而可申談候、尤末々輕キ者とも此段頭支配より可申渡置候

但本堂部屋無之輩者御用有之節、御目付江相届候上宿坊ニ而可申談候

右之通可相心得旨向々江可被相達候

七月

黒鍬之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭
江

溜詰同格・諸番頭
諸物頭・諸役人
寄合

御三家・国持并
庶流四品以上

一、御出棺御当日御供ニ而 御殿江相詰候面々江御台所被下候間、人数書巨細ニ相認メ可差出候事

七月廿五日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

御中間頭江
御小人頭

御葬送之節龜前堂より御行列ニ相立候持物并着用之イロ、於場所増上寺役僧共より掛合次第請取、不都合無之様御行列ニ相立可申候様可被申渡候、依之申達候、以上

七月廿五日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

同年七月廿七日安芸守殿御渡孫太夫殿御達、当番所作内相達承付御徒押江相廻

八月四日

午上刻

御出棺

酉上刻

御葬送

右之通候間被得其意向々々江可被申達候

七月廿七日

同日当番所作内相達、承付之上御使組頭助左衛門を以返却

御徒目付組頭

御葬送之節御供并御先勤之者并 御法事中出役之者江御賄被下

候間人数書早々可差出事

但 御葬送之日者一同家来末々迄 御法事中ハ泊有之分計、

上下共

七月廿七日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

同日安芸守殿御渡、甚左衛門殿外御兩人御名前ニ而当番所作内相達 覚

覚

一、御出棺御供之面々布衣以上ハ白帷子長袴、布衣已下ハ白帷子半袴可着事

但上下ハ小紋ニ而も無地ニ而も可為勝手次第候

一、御出棺ハ御道筋江挑灯・水桶出し可申事

但挑灯ハ紋附有無之無構、常之を用可申候

一、御道筋之屋敷前江家来罷出不及候事

一、窓蓋可仕事

右之趣向々々江可被達候

七月廿七日

同年同月廿八日安芸守殿御渡、邦之輔殿御達

御出棺之当日 御本丸者白帷子麻上下、西丸者染帷子麻上下

着用之事

右之通可被相触候

七月廿八日

同日玄蕃頭殿御渡、邦之輔殿御達

八月

二日

高家・雁之間詰同嫡子・御奏者
番同嫡子・菊之間縁頼詰同嫡子

三日

溜詰同格
御譜代大名

五日

惣出仕

六日

諸番頭・諸物頭
諸役人・寄合

七日

外様万石以上

九日

溜詰同格・国持并庶流
四品以上

右之通為伺御機嫌出仕候様可被相触候

七月廿八日

同日御同人御渡御同人御達当番所渥美又兵衛相達、承付之上御徒
押江廻ス

御直参之面々

御初七日過髭剃可申候

一、陪臣者 御初七日過月代剃可申候

但 御目見仕候陪臣も同断

右之通可被相触候

七月廿八日

一、御出棺 御葬送之節、建・開絵図面并御行列式冊・御達書壱通
掛り長坂半八郎差越、御使組頭助左衛門江相渡、為写取候様申

達置候

同年八月朔日甚左衛門殿御渡、依田源十郎口上添

御中間頭江
御小人頭

御法事之節掛り御中間目付・御小人目付・御使之者ハ勿論其外
掛リニ無之出役之者迄も、勤番大名宿坊江罷越如何敷引合茂有
之、且支度等度々懇望致候儀も有之候由、如何之事ニ候、今度
御葬送・御法事中右様之儀決而無之様厚可被申渡候、右者
備前守殿・安芸守殿より御内々御沙汰之品も有之候ニ付申渡候
間、万一如何敷儀も相聞候ハ、急度可及沙汰候条、精々厚相心
得候様可被申渡候

七月

右御書取壱通、当番世話役東助、頭取貢作・藤兵衛、御供組頭孫
兵衛・御使組頭弥次郎江相達、尤夫々江嚴重通達可致段申渡置候

同年八月二日安芸守殿御渡御懸り御三人御達、当番所渥美又兵衛
相達

於増上寺本堂拜礼之節

侍従已上

埋闕之内壱疊目

四品

同 外上より壱疊目

諸太夫

同 上より式疊目

布衣

同 上より三疊目

無官

同 上より四疊目

右之通可被得其意候

八月二日

同年八月二日越中守殿御渡織部殿御達、当番所渥美又兵衛相達

明後四日 御出棺之事ニ候ニ付、火之元随分入念申付候様

向々江可被達候

八月二日

同日越中守殿御渡、孫太夫殿御達

御目見以下之者共 御本丸・西丸共来ル八日より月代剃可申候

一、坊主・組頭共ニ明四日より月代剃可申候

一、同心以下其外軽きもの共右同断

右之通可被相触候

八月

同日備前守殿御渡、孫太夫殿御達

御出棺午上刻与被 仰出ニ者候得共、四時前ニも可相成候間、其

心得ニ而廻し之儀向々江茂可被達候事

八月

同八月三日安芸守殿御渡、御同人御達

於増上寺御法事日割

八月

六日

初日

十五日

中日

十九日

結願日

廿一日

御経供養

右之通成候間可被得其意候

八月

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

明四日 御出棺之御刻限御早メニ相成候ニ付、御供・御先共、

明朝六半時早メ可被相揃候、此段申達候事

八月三日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

同年八月十日越中守殿御渡彦左衛門殿御達、当番所作内相達承付

御徒押江相廻

普請者来ル十三日より 御免ニ候間、其段可被相触候

八月十日

同日御同人御渡御同人御達、当番所作内相達承付之上御徒押江相

廻

八月

十二日

御三家・溜詰同格・御譜代大
名并寄合

十三日

高家・雁之間詰同嫡子・御奏

者番同嫡子・菊之間縁頼詰同
嫡子・諸番頭・諸物頭・諸役
人

十五日
惣出仕

右之通為伺御機嫌出仕候之様可被相触候

八月十日

同年同月掛りより差越承付之上返却、御供組頭次左衛門江相達

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

来ル廿二日増上寺新 御廟所江 御参詣、御行列者無之候得共

御轅ニ候間、白丁着其外 御轅之時之通相心得可申候

一、かめい坊可差出候

右之通申達候事

八月十六日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

増上寺新 御廟所江 御参詣之節、表向御供并御先勤之面々

御本丸方ニ而相勤候事

一、御本丸御駕籠台より御定式御道筋 御装束所江被為 成、御
同所より 御轅ニ而 御参詣相済 御装束所江被遊 御立寄、
夫より 還御之積相心得、御先勤其外 御目見場所等之儀諸事

新 御廟所江 御参詣之節之通ニ候事
右之通申達候事

八月十九日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

増上寺 御廟所江 御成之節、御供并御先勤之面々御定式増上

寺 御成之通申談、詰衆・高家等之予参者無之積り相心得

御装束所江被遊 御立寄、御轅ニ而被為 成候節、御供建

場・開場等之儀 文昭院様 御靈屋江被為 成候節之通相心

得候事

右之通伺相済候ニ付申達候事

八月十九日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

右式通懸りより達ス、承附之上返却

御徒目付組頭江

増上寺新 御廟所江 御参詣之節、御当朝 御本丸江被為

成候ニ付、左之通

一、御挾箱 四走

右者御当朝 御本丸奥より請取、御供ニ相廻可申事

一、御駕籠

右者 御召替御駕籠御当朝西丸より 御本丸江請取 御参詣之

節 御召^二仕り候積相心得、御当朝西丸より被為 入候ハ、
御召之御駕籠者 御参詣之節 御召替之積相心得 還御相濟
候ハ、西桔橋内御庭口江相廻可申事

一、御轅

右者例之通御細工所より受取、御当朝直^二増上寺御先江相廻可
申事

一、御参内傘

一、御先傘

右者御前日西丸陰時計江相廻改濟 御本丸江持参、御当朝増上
寺御先江相廻し可申事

一、御金剛

右者御前日西丸陰時計江相廻御用之分奥江相渡可申候、御先御
用之分ハ支配向^二而持参可被致事

一、御沓・柳台共

右者御当朝増上寺御先江相廻可申事

一、御茶弁当

右者御当朝 御本丸より出候積候事

一、御蓑箱

一、同御雨覆

一、御床机

右者御当朝持人西丸江差出為請取 御本丸御玄関前江相揃、右
之外御長刀其外御定式 御参詣之節御用意御道具者 御本丸
御玄関^二而御徒頭より請取可申事

一、蒔絵御長刀

右者御当朝 御本丸御徒頭より受取、増上寺御先江相廻可申事
右之趣伺相濟申候、依之申達候事

八月十九日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

御徒目付組頭

増上寺新 御廟所江

御参詣之節御注進并 附人左之通

御成御注進

御小人方

一、御道具出候由

御先

一、御駕籠被為 召候由

同断

還御御注進

御小人方

一、御駕籠被為 召候由

御本丸

一、下乗橋より

附人
同断

右之通相心得可申事

八月十九日

御掛り
御三人

御徒目付組頭

増上寺新 御廟所江

御参詣之節 御装束所より御注進

一、御轅被為 召候由

御小人方

一、白張御先見候由

勅額御門江
附人
同断

右之通 文昭院様勅額御門江可申込候事

八月十九日

御掛り
御三人

右三通当番所作内相達承附之上返却、御供組頭喜太郎江相達

同年八月廿一日越中守殿御渡、当番所より相達ス

国持并庶流・外様万石以上・交替寄合・表高家・寄合并小普請

之面々明後廿三日より月代剃可申候、溜詰同格・御譜代大名・

高家・雁之間詰・御奏者番・菊之間縁頼詰・諸番頭・諸物頭・

諸役人・御番衆月代剃候儀ハ先可有延引候

右之通可被相触候

八月廿一日

同月廿二日越中守殿御渡邦之輔殿御達、当番所矢田堀専右衛門相
達

増上寺 新御廟所江 御参詣相濟候ニ付明廿三日惣出仕之事

右之通可被相触候

八月廿二日

一、明廿三日出仕之面々居残

御法号拜見被 仰付候旨矢田堀専右衛門相達

一、明廿三日五役江

御法号拜見被 仰付候ニ付、麻上下用意可有之旨当番所組頭依

田源十郎相達

但詰合之者計ニ而宜旨是又相達ス

八月廿二日

同日備前守殿御渡市郎兵衛殿御達、当番所満田作内相達

一、今晚

御靈牌大方丈江 御遷座被遊候間向々江可被達候

八月廿二日

同八月廿三日甚左衛門殿被遣

慎徳院様

右於小広間御当番孫太夫殿御法号持被為出、詰合之者拜見被

仰付候

丑八月廿三日

同日当番所渥美又兵衛相達、承附御徒押江相廻

御徒目付組頭江
火之番組頭

御法事相濟

御尊牌方丈江被遊 御遷候ニ付、御法事中之下乗所之儀ハ平日之

通相成方丈表門左右江、下乗杭外 御靈屋脇通りハ平生之通往来

相通候事

右之通伺相濟候事

八月廿三日

鵜殿甚左衛門
青木新五兵衛
荒尾土佐守

同年八月廿六日越中守殿御渡新五兵衛殿御達当番所渥美又兵衛より差越、承付御徒押へ相廻

溜詰同格・御譜代大名・高家・雁之間詰・御奏者番・菊之間縁

類話・諸番頭・諸物頭・諸役人・御番衆不殘明後廿八日より月
代刺可申候

右之通可被相触候

八月廿六日

同年同月廿九日越中守殿御渡、新五兵衛殿御達

九月

朔日

国持・庶流・四品已上

四日

惣出仕、此後出仕不及候

右為伺 御機嫌出仕候様可被相触候

八月廿九日

同年九月十日右式廉当番所満田作内相達ス、五役承附いたし御徒
押江相廻ス

但馬守殿

新五兵衛殿

御中陰明ニ付来ル十三日惣出仕之事

右之通可被相触候

丑九月

一、鳴物之儀所作ニ仕候者共計、来ル十三日より可被差免候
右之通可被相触候

丑九月

(朱書)
「四百廿六 四百廿七、四百廿八、四百廿九、四百三十、四百三十一
組合」

同年九月十六日伊勢守殿・但馬守殿被仰渡候段市郎兵衛殿被申渡、
当番所満田作内相達ス 御誠勤分江次左衛門より為相達候事

御目付江

近年打続御物入多、殊ニ異国船度々渡来御備筋等之御用途莫太
之儀ニ付御儉約被 仰出候折柄ニ候得共、御籙本・御家人等勝
手向困窮之趣被為 聞召、格別之以 思召万石以下御籙本之
面々并御家人まで拝借金被 仰付、小給之者末々ニ至り候而者
夫々御金被下旨被 仰出候、右様格別御仁恵ヲ蒙り候上者兼而
被 仰出候非常武備之心掛專一ニいたし、弥以質素節儉相用武
器等分限ニ応し誠実ニ嗜候様可致候、万一心違之もの於有之者
急度御沙汰之品も可有之事ニ候条 御主意ニ不違様可被相心得
候

右之通万石以下之面々江可被相触候

九月十六日

(朱書)
「四百廿七 四百二十六、四百廿八、四百廿九、四百三十、四百三十
老組合」

御目付江

近来都而御籙本・御家人共一統勝手向及困窮候之趣相聞候、右
者数年来いつとなく花奢之風ニ馴、衣食住者勿論万事物好等ニ美

麗を尽し無益之雜費有之候故、勝手向者不如意ニ至りおのつか
ら実意も日々薄く非常之嗜茂無之様成行、畢竟其身之分限ヲも
不顧故之儀ニ候、当時文武之芸等可致修行ニも勝手向不如意ゆ
へ自然与行届兼子孫之養育も不束ニ有之候ニ付、其子孫ニ至り候
而も情弱ニ相成不宜事而已見聞ニ及ひ、往々心得違を生し終ニ節
儀欠ケ候儀杯をいたし出、其家名をも汚候類粗有之候義ニ有之
候、去ル卯年諸御貸附半高棄捐・貸金銀利下ケ又者相對貸等品
々御救助筋被成下候上之儀、別而心を用ひ質素儉約を專一ニい
たし惣而礼儀を正し常々格式分限を弁ひ、且非常之心懸置候様
取計可申事ニ候、近年ニ至り候而者一統相慎候由ニ者候得共久々
之風儀ニ馴候而兎角衣食住等之外聞を飭り酒宴遊興ニ長し、武
備心掛ケ等薄く敢而恥候こゝろもなく、不法之借財不仁之用金
知行所江申付候類も間々有之哉ニ而、素より一己之榮耀ニ而已心
掛ケ事者有之間敷以之外之事ニ候、依而者御糺之上夫々嚴重ニも
可被仰付之処、今 御仁恵之御沙汰被 仰出候条実以難有儀ニ
候、然ル上者面々聊異失なく別而身持等慎、一円ニ文武之道相
励節儉之儀心懸非常之場ニ臨時不覚無之様武器等手当致、朋
友・親類江も心附申談、子孫をも教訓いたし永々家名を保、忠
孝ニ叶候様風義を改可申事ニ候、此上心得違等有之候者一際嚴
重之御沙汰可被及儀ニ候条、其旨を能々相心得頭支配ニ而厚く
教示可致事ニ候

右之通万石以上江可被相達候

九月十六日

(朱書)
「四百廿八 四百廿六・四百廿七・四百廿九・四百卅一 組合」

御目付江

此度拝領被 仰付候面々且拝借并御金被下候もの頭々、為御礼
老中・若年寄中江可被相廻候

但頭支配有之分者其頭支配江為御礼相越候様可致候
右之通可被相達候

九月

御目付江

一、 九千石より	金百五拾兩
一、 八千石	金式百兩
一、 七千石	
一、 五千石迄	
一、 四千石より	
一、 三千石迄	
一、 貳千石	金百兩
一、 千石	金五拾兩
一、 九百石より	金四拾五兩
一、 八百石迄	
一、 七百石より	金四拾兩
一、 六百石迄	
一、 五百石	金三拾兩
一、 四百石	金貳拾五兩
一、 三百石	金貳拾兩
一、 貳百石より	金拾五兩
一、 百石迄	

一、御足高・御足扶持共拝借被 仰付候事

一、御役料者相除キ候事

一、御扶持方、拾人扶持取五拾俵之積りたるへき事

一、高二附候御扶持方者相除キ候事

一、返納之儀、来々卯年より拾ヶ年賦たるへく事

右之通可被相心得候

九月

(朱書)

〔四百廿九 四百廿六・四百廿七・四百廿八・四百三十、四百三十壹組〕

今度被仰出候百俵以下之者江被下金割合、左之通

受取方之儀御勘定奉行江可被談候

一、百俵より

金七兩

一、七拾俵より

金五兩

一、四拾俵より

金四兩

一、貳拾俵より

金三兩

一、拾五俵迄

金貳兩

右之通可被相心得候、尤被下方之儀者百俵以上之もの拝借金之振
合ニ准し被下候間、可被得其意候

(朱書)
組合

〔四百三十・四百三拾壹 四百廿六・四百廿七・四百廿八・四百廿九〕

同年十月四日伊勢守殿御渡御書付写并御書取共、甚左衛門殿より

厚御口上添御達

大目付江
御目付

是迄質素節儉之儀被仰出候得共 御主意行届兼候、此度被 仰
出之趣遺失無之哉、何れも者勤柄之儀銘々心得も可有之、格別
ニ心を用徒法ニ不相成様思慮可被致候事

五役頭江

今般格別之御儉約被 仰出候ニ付而者、諸御褒美願・請取もの・
諸御手当願其外都而御入用ニ相響候儀者厚勘弁可被申立候、当
節御入費多端之折柄厚思召を以拝借金・被下金等も被仰付候儀、
一同厚く難有奉存 御恩沢忘脚不仕、聊ニ而も御儉約筋行届
御主意貫通いたし候様厚く心を用ひ相勤候様可被致候事
右之趣組中江も可被申渡候事

五役頭江

先般格別ニ御儉約被 仰出、万一等閑之輩も有之候ハ、御沙汰
之品も可有之旨御触置有之、猶又今般一同拝借金・被下金等被
仰付候ニ付而も弥以質素節儉相用、武器等分限ニ応し誠実ニ
相嗜候様可致旨被 仰出候、当節 御代替且近海御備向等ニ付
而者御入用多端ニ差騰候折柄、武家困窮之趣聞召拝借金・被下

金等被 仰付候儀美々以恐入候儀ニ候、是迄も度々厚被仰出も有之候得共一同世上之悪弊ニ泥ミ一廉之儉約も不行届候故、武器用意等手薄ニ罷在候段申訳も無之恐入候次第ニ候、依之銘々心得茂可有之候得共一同厚く被申合格別ニ質素節儉行届候様可被致候、就而者先般伊勢守殿大目付・御目付江別段御書取を以被仰渡候趣も有之上者、支配向之儀茂同様諸向之見合ニも相成候ニ付、善悪共自然外々より厳格ニ取調不申候而者不相成儀も有之候間、銘々其心得を以篤与申合 御主意行届キ候様可被致候、組中江も右之趣厚く申諭質素相守候様精々世話被致、申合等も睨与相立候様可被致候事

丑十月四日

(朱書)
「四百三拾貳」

同年十月十八日

御徒目付組頭江

此度 西丸勤之者 御本丸江被召連初而本番相勤候節、服紗小袖麻上下着用、組之儀者平服ニ而可相勤候、且本御番相勤候節者御届可有之候

右之通伺相濟候間為心得申達候事

十月

柳生播磨守
松本十郎兵衛
一色邦之輔

(朱書)
「四百三十三」

同年十月廿一日十郎兵衛殿被遣写老通当番所菅野一郎より達ス、承附致御徒押江廻ス

御目付衆

御賄頭
表御台所頭

此度御儉約被 仰出候ニ付、先前之振合をも見合御年限中諸席御料理御菜減并御酒者三之間迄、年始御規式・五節旬等月々三日之外差出申間敷哉、其段但馬守殿江相伺候処、御料理者先是迄之通居置、御酒被下方之儀者伺之通可取計旨被仰渡候間、明廿二日より右之通平日者御酒差出不申候、此段及御達候

十月廿一日

(朱書)
「四百三拾四」

同年十月 日

西丸御中間・御小人御供打込勤被 仰付候ニ付
此後明キ御座候節取扱方奉伺候覚

一、此度御中間・御小人役々并御番所向共西丸より御供打込勤被仰付人数相増候に付、定人数ニ相成候迄以後明キ出来候節者増居候人数より追々操入減切ニ可仕候、併御中間・御小人共三組宛有之、且御中間・御小人打交居候場所茂御座候間、明次第組々之無差別操入候而者混雑仕候、依之組々之役々・番人共定人数御座候ニ付、一組限りニ而取扱仕度奉存候、譬者打込勤之者一組ニ式人有之候得者、其組ニ而此後明キ式人出来候迄者操入候

ニ付減切ニ可仕候、明キ三人メより者他之組ニ不拘跡役相伺可申候、又打込勤之者一組ニ三人御座候得者明キ三人迄者減切ニ仕、明キ四人メより者跡役相伺可申候、都而右之振合取扱可仕哉与奉存候

一、御中間目付合
御小人目付

定人数百人
打込勤拾弍人

内

外山和太夫組打込勤三人、明キ四人メより跡役相伺可申候

伊藤次兵衛組同五人、明キ六人メより同断

藤村権左衛門組三人、明キ四人メより同断

大村友右衛門組同七人、明キ弍人メより同断

松永定作組同無御座候、明キ御座候得者直ニ跡役相伺可申候

足立鉄平組同、同断

一、同見習

内

是迄拾弍人
打込勤八人

松永定作組打込勤弍人、明キ三人メより跡見習相伺可申候

藤村権左衛門組同七人、明キ弍人メより同断

足立鉄平組同三人、明キ四人メより同断

外山和太夫組同無御座候、明キ御座候得者直ニ跡役見習相伺可申候

伊藤次兵衛組同、同断

一、御草履取役

定人数拾人
打込勤三人

内

藤村権左衛門組打込勤七人、明キ弍人メより跡役相伺可申候

足立鉄平組同断

大村友右衛門組同断

一、御玄關番

定人数弍拾五人
内見習三人
打込勤七人
内見習三人

内

藤村権左衛門組打込勤見習、明キ弍人メより跡番相伺可申候

大村友右衛門組同見習、明キ四人メより同断

足立鉄平組同見習、明キ御座候得者直ニ跡番相伺可申候

一、中之口番

定人数弍拾九人
内見習三人
打込勤五人
内見習七人

内

足立鉄平組打込勤弍人、明キ三人メより跡番相伺可申候

大村友右衛門組同、同断

藤村権左衛門組見習七人、明キ御座候得者直ニ跡番相伺可申候

一、御風呂屋口番

定人数六人
打込勤六人

内

藤村権左衛門組打込勤弍人、明キ三人メより跡番相伺可申候

足立鉄平組同断

大村友右衛門組同断

一、大奥御台所口前御門番

定人数、過人共拾三人
西丸御広敷御長屋御門番
より 打込勤六人

内

外山和太夫組打込勤老人、明キ三人メより跡役相伺可申候

松永定作組同式人、明キ三人メより同断

伊藤次兵衛組同三人、明キ四人メより同断

一、大奥裏締戸番

定人数九人
打込勤六人

内

外山和太夫組打込勤老人、明キ三人メより跡役相伺可申候

松永定作組同式人、明キ三人メより同断

伊藤次兵衛組同三人、明キ四人メより同断

一、御持鎗之者

定人数拾八人
打込勤拾三人

内

外山和太夫組打込勤三人、明キ四人メより跡役相伺可申候

松永定作組同四人、明キ五人メより同断

伊藤次兵衛組同六人、明キ七人メより同断

一、御長刀役

定人数七人
打込勤三人

内

足立鉄平組打込勤式人、明キ三人メより跡役相伺可申候

大村友右衛門組同老人、明キ式人メより同断

藤村権左衛門組無御座候、明キ御座候得者直ニ跡役相伺可申候

一、御小道具役

定人数式拾八人
打込勤式拾七人

内

藤村権左衛門組打込勤九人、明キ拾人メより跡役相伺可申候

足立鉄平組同断

大村友右衛門組同断

但御持鎗之者・御長刀役・御小道具役者役米御座候ニ付、明

キ跡減切ニ相成候節々役米上り之儀可申上候

一、亀井坊

定人数老人
打込勤老人

右者足立鉄平組打込勤老人御座候ニ付、明キ式人目より跡役相伺可申候

但御足高役切米上り之儀者前々之通取扱可仕候

一、野方御使之者

定人数拾九人
打込勤九人

内

外山和太夫組打込勤式人、明キ三人メより跡役相伺可申候

松永定作組同三人、明キ四人メより同断

伊藤次兵衛組同四人、明キ五人メより同断

一、御使之者

定人数九拾老人
打込勤七人

内

藤村権左衛門組打込勤式人、明キ三人目より跡役相伺可申候

足立鉄平組同式人、明キ三人目より同断

大村友右衛門組同三人、明キ四人目より同断

右野方御使之者并御使之者者頭共手切ニ而申渡候得共、前書之振合ニ心得居取扱申度奉存候

右之通相心得取扱可申哉御内慮

丑十月

御中間頭
御小人頭

御附札

△書面伺之通可被心得候

〔朱書〕
〔四百三十五〕

同年十一月十八日

一、組之内跡役跡番明キ切申上之儀、御目付衆御聞置ニ而者不宜候ニ付、以来御扣共式通ニいたし差出候様可致旨十郎兵衛殿被仰聞候事

丑十一月

〔朱書〕
〔四百三十六〕

同年十一月廿日書面御勘定所より差越候ニ付、下ケ札いたし御勘定河合和三郎江返却

御中間頭衆

御勘定所

西丸御中間目付人数之儀、今般 御本丸江打込勤相成増減等者無之哉否早々承知いたし度、此段及御問合候、以上
十一月

下ケ札

御書面西丸御中間目付之儀、今般 御本丸江拾人打込勤ニ相成候ニ付、西丸勤之者拾式人ニ相成申候

丑十一月

御中間頭

〔朱書〕
〔四百三十七〕

同年十二月廿九日書面当番所町野十太郎より相達、承附いたし返却

御中間頭

外山和太夫
松永定作
伊藤次兵衛
御小人頭

藤村権左衛門
足立鉄平
大村友右衛門
御駕籠之者頭
永江次郎右衛門
梅村熊次郎

右之者申渡候儀有之候間、明晦日五ツ半時 西丸江罷出候様是御申渡可有之候、尤病氣・差合等ニ候ハ、名代之者差出候様是又御申渡可有之候、以上

十二月

松下 大学
松平上野介

同年十二月晦日但馬守殿被仰渡候段、於 西丸小広間大学殿立合上野介殿被申渡候

御中間頭

外山和太夫
松永定作
伊藤次兵衛

銀老枚ツ、

右 公方様 西丸被為 在中 御本丸江

折候ニ付、為御手当被下候事

同日

御小人頭
藤村權左衛門
足立鉄平
大村友右衛門
御駕籠之者頭
永江次郎右衛門
梅村熊次郎
御成数度御供仕骨

御中間目付合
御小人目付合
拾五人
御持鍵役
拾老
御草履取役
三人
御長刀役
三人
御小道具役
式拾五人
野方御使
九人
御駕籠之者
四拾人
触番之者
拾七人
黒鋏之者
拾五人

右 公方様 西丸被為 在中 御本丸江 御成数度御供仕骨 折候ニ付、為御手当金五拾両被下候旨但馬守殿被仰渡候段、大学

附け札(朱書) 「此廉不分明ニ付校合可致事」

殿立合上野介殿被申渡候事

十二月

(朱書) 「四百三拾八 四百三拾九と組合」

(朱書) 「嘉永七寅年十二月五日改元」

安政元寅年正月廿日御用所海防掛り御徒目付より差越、中・小・黒・掃者別段屯所与申者無、非常之節何れも 御城江罷出候儀ニ候、尤当番之者江者御台所頂戴、欠附罷出候者者多人數ニ付郡代ニ而御賦被下候由、其節ニ至り差支候間已来其筋江惣人数等之儀御達相成候趣ニ有之候段河津三郎太郎申聞候、御供組頭江も右書面相廻し人数取調候様喜太郎江申談候事

(朱書) 「四百三拾九 四百三拾八と組合」

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

異国船渡来非常之節支配向之者家来共ニ至ル迄、当番之者相除キ寄場所江相詰候者、昼夜四度分宛御賦被下候積り、且於場所々々御渡し有之候、就而者人数并家来下々迄之惣人数取調早々可被申聞候、尤御軍役ニ相泥ミ無益之雜人・雇人等召連候儀可成丈相省き御実備之处勘弁いたし可被申聞候

但屯所相立テ翌日夕刻より御賦被下候積ニ付夫迄之兵粮者銘々用意いたし候様可致候、御賦受取方并場所等之義者猶

又可相達候

右之趣伊勢守殿被仰渡候事

寅正月

井戸石見守
大久保市郎兵衛
堀 織部
永井岩之丞

同年二月三日

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

異国船渡来ニ付万一早盤木之合図有之節、寄場江罷出候面々御
賦請取場所左之通

一、増上寺
一、馬場先御門内
一、松平下総守屋敷
一、一ツ橋御門外
一、明地

一、竹橋御門内
一、西丸大手御門際
一、腰懸後御堀端

右之通最寄々々ニ而相渡し候積ニ付此段申達候事

二月三日

堀 織部
永井岩之丞
岩瀬修理

同年二月九日

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

一、異国船渡来中若 御城為御警固寄場相建候節者夫々於場所々々

御扶持方御賦被下候ニ付、右様之場合ニ臨候節 御城内向江
相詰候者平常御台所不被下向ニ而も非常之儀ニ付 御殿江相
詰候者御湯漬其外御賦ニ准し被下候旨、但馬守殿江伺相濟候ニ
付、人数書早々取調拙者共江可差出候事

二月

堀 織部
永井岩之丞
岩瀬修理

一、西丸勤之者茂右同断取調、上野介殿江差出候様御達之事

二月九日

同年二月十五日

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

一、異国船渡来中若 御城為御警衛寄場相建候節 御殿江相詰候
者共者御湯漬其外御賦ニ准し被下候ニ付 西丸江罷出候人数書
取調差出候様申達置候処未夕差出無之、右者早々取調可差出候
事

二月十五日

松平上野介

(朱書)
「四百四拾」

同年七月 日書面御手当銀被下置候旨、但馬守殿被仰渡候事

黒鋏之者頭
御中間頭
御小人頭

御中間
御小人 合

六拾五人

黒鯨之者

六拾五人

右者当春垂墨利加船渡来之節浜御殿并高輪東禪寺江正月廿九日
より同二月廿七日迄、老ヶ所江日々式人宛出役仕骨折相勤候ニ
付、別紙御書取写之通御手当銀被下置候旨被仰渡候、依之申達
候事

鶉殿民部少輔

一色邦之輔

岩瀬修理

但馬守殿御下ケ

覚

書面之者共江為御手当銀六拾五枚被下候間、勤方次第ニ寄夫々
勘弁致し相応ニ割賦候様可被致候事

七月

(朱書)
「四百四拾壹」

同年閏七月廿一日但馬守殿御渡右近將監殿御達老通、当番所笠原

新左衛門より達ス

御服明 御代替初而近々山王江 御参詣被遊候、御清之儀者

前々之通被相心得向々江可被達候、御日限之儀者追而相達候

閏七月十九日

同年閏七月廿五日大和守殿御渡、右近將監殿御達

大目付江
御目付

来ル八月二日 御服明 御代替初而山王江 御参詣被遊候事

閏七月

同年閏七月廿七日御用所斎藤直藏より差越、下ケ札致し同人江返却

御目付方

御勘定所

此度溜池山王江 御参詣ニ付先達而紅葉山 御参詣之節御

小人目付・御中間目付其外役々麻上下・役羽織御受取「方之

儀、都而其節之通此度も御受取」相成候哉否早々致承知度、此
段及御掛合候

寅閏七月

下ケ札

△
御書面御中間目付・御小人目付其外役羽織・麻上下都而
受取方之義、当月十七日紅葉山 御参詣之節為受取候分
相用、不足之分取調御断申上候

閏七月廿七日

御中間頭
御小人頭

同年閏七月廿九日

御徒目付組頭江

来月二日溜池山王江 御参詣之節、御先勤之面々別当觀理院江
相揃候事

一、御先勤之面々之内供之分観理院手狭ニ付、同院江被相越候者直
ニ岡部美濃守屋敷前江差出候之事

一、同断外供之分紀伊守殿中屋敷角下馬所ニ相残り候分者、九鬼長
門守前江差遣、岡野大学頭屋敷角下馬所ニ相残候分者松平出羽
守屋敷脇江相払、岡部美濃守屋敷前下馬所ニ相残候分者其場所ニ
差置候事

下乗所

一、表門前

一、裏門前

下馬所

一、表門之方岡野大学頭屋敷角

一、同断紀伊守殿中屋敷角

一、表門之方岡部美濃守屋敷前

右之通伺相濟候ニ付申達候事

閏七月廿九日

松本十郎兵衛
一色邦之輔

同日

御徒目付組頭江

溜池山王江 御参詣之節、御先勤之面々別当観理院江相揃候様

可仕候

一、御先勤之面々之内供之分、観理院手狭ニ御座候間、罷越候而直

ニ岡部美濃守屋敷前江相払候様可仕候

一、御老中方・若年寄衆・御側衆・奥向供之分者樹下近江構之内差
置、外供之分者同所裏門之内江見計差置候様可仕候

一、表門方下馬所之儀者 通御并御注進ニも御座候間、御先勤之面々

外供之分、紀伊守殿中屋敷角下馬所ニ相揃候供之分者九鬼長門守
屋敷前通ニ差置、岡野大学頭屋敷角下馬所ニ相揃候供之分者岡部
美濃守屋敷前通り見計差置候様可仕候

一、御供惣同勢場、井伊掃部頭屋敷後向横町、土屋勝右衛門屋敷脇
通りニ差置候様可仕候

右之通伺相濟候ニ付申達候事

閏七月

松本十郎兵衛
一色邦之輔

御徒目付組頭江

一、来月二日溜池山王江 御参詣之節 御成掛ケ并 還御之節、

観理院構内御小用所江被遊 御立寄候ハ、御供行形ニ其儘

相留候事

一、御供建場・開場別紙絵図面并御道書・御注進書共

右之通伺相濟申候ニ付申達候事

閏七月

松本十郎兵衛
一色邦之輔

(朱書)

「四百四拾式」

安政二卯年五月 日当番所浅沼三郎兵衛より相達ス

一、天下御一統之支干御相当ニ付、御譜代大名・布衣以上御役人出

仕例刻御登 城有之、殿中染帷子ニ而候

一、右同断ニ付明日御能有之、殿中染帷子麻上下着用、五半時御登
城有之候事

(朱書)
〔四百四拾三〕

同年五月 日類例書相添民部少輔殿 江差出候処、後刻書面之通組
替可申渡旨御同人被申渡候事

覚

小野鉄兵衛組
同人弟

鉄兵衛父小野弥兵衛御中間相勤候節
次男ニ而新キ御抱入被 仰付候者

田中市兵衛

右市兵衛儀兄鉄兵衛此度御中間頭被 仰付候ニ付、兄之組ニ罷
成候間、外山和太夫組 江組替可申渡与奉存候、依之奉伺候、以
上

五月

御中間頭
兩名

(朱書)
〔四百四拾四〕

同年五月廿九日表御右筆所より問合

表御右筆所

御中間頭

小野鉄兵衛

右鉄兵衛儀何之誰跡役被 仰付候哉、御答下ケ札ニ而被仰聞候
事

五月

松井新三郎

札ケ下

御書面鉄兵衛儀松永半六跡御中間頭被 仰付候

五月廿九日

御中間頭

小野鉄兵衛

(朱書)
〔四百四拾五〕

同年七月廿六日短冊別紙添当番所筑紫弥太六相達ス

黒鍬之者頭
御掃除之者頭

江

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

来辰春中於学問所学問吟味有之候、諸事前々之通相心得学問心
掛ケ候者罷出候様可致事

右者但馬守殿御渡ニ付相達候

一、学問吟味ニ付、布衣以上御役人者惣領・次男・三男・厄介、且
寄合・布衣以下御役人・御番方・小普請之面々・御目 見以下
之もの共当人并惣領・次男・三男・厄介等迄、一統御書出、尤
書出方之儀者別紙短冊之通相認、三枚ツ、可差出事

但厄介之儀者、其家ニ居付候者者格別、他より引請養育致し候
者者統之科并引請候訳下ケ札を以委細可申聞事

一、吟味書物之定并可致弁書数等之書付、学問所ニ而可相渡候間、
初而吟味罷出者者当人直ニ学問所玄関江罷越書付請取、難相分儀
も有之候ハ、学問所勤番組頭江可致対談候

但問合使者ニ而申遣候儀勝手次第之事

一、吟味受候経書・註本相定有之候間夫ニ而弁書いたし候得共、学
派書於短冊可差出事

但無本ニ而吟味無之候事

一、弁書認メ方不案内之もの者吟味当日手本差出置候事

一、是迄吟味罷出拝領物有之候分書出ニ不及候事

一、九月十五日限ニ差出有無とも可申聞事

一、頭替・名改其外相替儀有之候ハ、其都度々々ニ引替短冊可差出事
但部屋住・厄介等も同様可相心得候

右者諸事去ル丑年之通相心得可差出候、依之相達候事

七月廿六日

鵜殿民部少輔
松本十郎兵衛

竪九寸余

一、初場 小学 本註

右御試請可申候 若御試難請候ハ、
右出来可仕与認

一、經義科

何之 何誰
何之 何誰

右之通御試請可申候 同断

一、歴史科

何之 何之

右之通御試請可申候 同断

一、文章科 論策

右之通御試請可申候 同断

右何年何月入門仕、幾年稽古仕候、且師範之者病死、其
後誰門人ニ相成申候、以上

卯九月

(朱書)

「四百四拾六 四百五拾四組」

同年十月十三日当番所永井脇太相達ス

御目付衆
西丸御目付衆

松平河内守
水野筑後守

今度地震ニ而居宅皆潰又者類焼ニ及ひ候向、万石以下之面々・地
方取共拝借并被下金被 仰出候ニ付、各様并御支配向之内類焼・
潰家之分ニ候ハ、姓名・高附其外、宿所拝領屋敷・御役屋敷・
住居并借地、同居・部屋住等之訳、且皆潰并不残類焼者勿論住
居向・門長屋向ニ而建坪六分以上類焼又者潰家相成候歟、同断
六分以下類焼・潰家相成候歟、住居向傾仮養も難成程及大破候
歟之訳委細取調、半紙帳面ニ御認早々御勘定所江御差出有之候、
尤病死・家督願中之分、且又御咎等之儀有之慎罷在候分も有之
候ハ、其段も御申聞有之候様存候、此段及御達候

十月十三日

(朱書)

「四百四拾七」

同年十一月十九日安芸守殿被仰渡候段、半三郎殿立合四郎左衛門
殿被申渡候事

御目付江

金拾両ツ、

御中間
猪野七兵衛
伊沢可十郎

黒鍬之者
小池林平
永田金之助
高橋桑次郎

右之者共去月二日地震之節御番所并御多門罷在立出候節怪我いたし候ニ付、為御手当書面之通被下候間、御納戸頭江相談受取可被相渡候事

十一月十九日

〔朱書〕
〔四百四十八 四百四十九組〕

〔朱で抹消〕
〔朱書〕
末保十五康年七月 由道具金其外其備落扣

〔為見合天保度伺濟之廉書拔置〕

一、道具代金之儀ニ付佐々木三藏・榊原主計頭江伺相濟申候事

覚

一、金四両 跡金

金貳両者道具代新役之者より差出

金貳両者同役惣中江差出

御長屋御門番

惣連印

新土戸番

惣連印

堀仕切土戸番

惣連印

大奥御台所前御門番

惣連印

一、右同断金貳歩

一、右同断金壹歩

大奥裏締戸番

惣連印

一、道具代金壹分貳朱

二丸御長屋御門番

惣連印

跡金貳歩

一、道具代金壹歩貳朱

二丸大奥御台所前御長屋御門番過人

惣連印

一、右同断金三朱宛

〆壹歩貳朱

二丸御台所脇御長屋御門番
同新御門番

惣連印

一、右同断金壹歩

二丸裏締戸番

惣連印

一、右同断金壹歩

御太鞍櫓下土戸番

惣連印

一、右同断金三分

御持鍵役

惣連印

一、私共勤向之内ニ道具金并跡金等之儀一切無御座候ニ付此段申上置候、且新規同役被 仰付候節振舞等不仕候様可仕旨奉畏候、以上

御本丸

野方御使

惣連印

一、道具金無之

西丸御納戸口番

惣連印

跡金壹分貳朱ト五百四拾八文

一、道具代金貳歩

同御台所前御門番

惣連印

跡金貳朱

一、道具代金貳分貳朱

同奥表仕切土戸番

惣連印

一、道具代金貳歩

同大奥御長屋御門番

惣連印

送り金壹両

一、右同断金壹歩

同裏締戸番

惣連印

一、道具代金三歩

同御持鍵役

送り金壹歩

惣連印

一、道具代金壹歩

同野方御使

惣連印

一、右同断金壹分

諏訪部鎌五郎所
御厩定番

惣連印

一、右同断金壹歩

村松万蔵
御厩定番

惣連印

一、右同断金壹分

曲木又六郎所
御厩定番

惣連印

一、右同断金壹歩

霧見七左衛門所
御厩定番

惣連印

一、右同断金三歩

三組御旗持

惣連印

(朱書)
「四百四拾九 四百四十八組」

同年八月

(朱書)

「此度新役被 仰付候節無益之手数相掛り候ニ付嚴重御書付、右
ニ付惣組中江三組申合相触候事」

御中間役々并御番所向新役被 仰付候者有之候節、部屋入用之
義天保度伺済之上申渡置候処、追々旧弊ニ立戻り外見質素之様ニ
廉ヲ附酒食等専ニ致し、或者代料ニ而為差出候向も有之、役成入

(朱書)
「四百五拾」

同年 月 日

覚

嘉永二酉年二月朔日姉病死ニ付引込、同九日御人少ニ付出勤申
渡候

触番之者
田野村銀蔵

用嵩候趣、素より少給之者ニ付為取続夫々見立遣候者も却而迷惑
致シ困窮ニ及候者も有之候由、又者入用を厭ひ無抛病氣申立退役
相願候者も有之哉ニ相聞如何之事ニ候、以来右様之儀無之様急度
相改、天保度相定置候入用之外余慶之入用相止、此度被 仰出
候御書付之趣嚴重ニ相守、違失無之様睚与可被申合候、若等閑ニ
相心得候者有之候ハ、急度取計方も可有之候、依之心得違無之
様兼而申渡置候事

卯八月

頭 三名

御供組頭中江

別紙之通申渡候間組中不洩様申達請書可為差出候、就而者組頭
役之儀者一統之手本ニ茂相成候ニ付、別而念入余計之廉有之候
ハ、早々相省、御書付ニ不背様相心得可申候、且諸濡御手当銘々
受取帳一覽之儀中絶いたし有之候ニ付、以来見置可申候間其都
度々々取扱候拙者共之内江請取帳可被差出候事

卯八月

賄役
小林平次郎
同年二月廿七日兄才助病死ニ付引込、三月七日御免

大奥裏締戸番
橋本半右衛門

同六丑年六月十日実母病死ニ付引込、同月廿一日御頭御差図ニ付御免

二丸御台所脇
御長屋御門番
高橋政太郎

同年八月八日高橋幸助娘病死致し候、倅政太郎定式之忌服受可申所、二丸御台所脇御長屋御門番御人少ニ付半減ニ而差免、且御規式 御成 御通行之節者遠慮可致旨申渡候

〔朱書〕
〔四百五拾壹〕

同年十一月十三日

此度私儀地震ニ付家作之儀御届申上候、右ニ付組役衆御見届御座候処、偽之儀申立候段不埒ニ付慎罷在候様被仰渡恐入奉畏候、急度相慎ミ罷在候旨此段奉申上候、以上

十一月十三日

伊藤次兵衛殿

向田鉄之進印

〔朱書〕
〔四百五拾貳〕

〔外山和太夫殿

下田奉行支配組頭

御組御中間
下田奉行手附出役
指田収次

右者此度下田表江為御用差遣候ニ付支度も有之候間、当卯冬御切米・来辰春夏御借米、願之通只今取越被下候段伊勢守殿被仰渡候ニ付、此上之処可然御取計有之候様致度此段及御達候、以上

卯九月

〔外山和太夫様

松村忠四郎

別紙老通御達申候、御落手可被成候、以上

九月六日

〔次兵衛様
鉄兵衛様

和太夫

組御中間下田奉行手附出役指田収次義、御用ニ付取越米致し候旨右支配組頭松村忠四郎より申越候間一応民部少輔殿江申上置、賄役を以御断書面下書書替所江突合、平日添状断之通本書程村紙式ツ折、御扣者美濃紙ニ而式通共御部屋江差出、受取方者常々取越之通賄役ニ而為心得申候、新例ニ付別紙之通御廻し申候、御一覽之上御返却可被下候、以上

九月廿日

〔朱書〕

〔右外山氏より廻し来り候ニ付留置、尤別紙三通共此方より返却〕

〔朱書〕
〔四百五拾三〕

同年八月 日

一、他向江組之者吟味又者逢^ニ罷出候節、御目付衆御立合無之節者、於誰方・何之吟味・無滞相濟候段、翌日御当番江御届書老通差出候事

卯八月

(朱書)
〔四百五拾四 四百四拾六組〕

同年十二月 日老通御月番鈴木四郎左衛門殿江詰合、五役^ニ而差出書面翌日御同人より御下ケ^ニ成、柳田勝太郎詰合^ニ付御談有之候者、一統小破之分者御救金願之儀他向より問合候節者不相成与答いたし候間、此度之儀組々皆大破^ニも可有之間差^ニ者無之候得共能々申合取調、可然旨被仰聞候由勝太郎申聞候、一統評議之上調方仕候

当月二日地震之節組之者家作向類焼・皆潰^并大破之者共江御救金被下置候旨、先達^而御書付を以被仰渡一統難有仕合奉存候、役々^ニ而取調候処住宅潰方銘々不同有之候得共、家根・壁・根太板落、柱廻り其外建具等迄悉及大破何れも難儀仕候、就^而者類焼・皆潰・大破之者共取調可申所、破損之者共茂漸竹木を以仮養方不同者有之候得共雨露を相凌居候間、夫々組頭共より、破損之者共者組^ニ寄纜之残り^ニ有之候由申聞候、可相成御儀^ニ御座候ハ、破損之輕重^ニ不拘何^茂少給之者難義仕、殊当節諸色上直之折柄一統当惑之者共計^ニ而難決仕候^ニ付、御中間・御小人・御駕籠之者・黒鍬之者・御掃除之者一統破損之者共江何卒格別之以 御仁恵、不限多少御救金被下置候様奉願候、左候得者

此上御奉公勤続之一助^ニ茂相成、於私共難有仕合奉存候、依之御内慮奉伺候、以上

卯十二月

(朱書)
〔四百五拾五〕

安政三辰年二月朔日丹波守殿御書取を以被仰渡候段、勘助殿立合十郎兵衛殿被申渡候

覚

右者如何之取計も相聞候^ニ付勤差免平御中間被仰付候、依之押込置可申哉此上之儀奉伺候、以上

二月朔日

押込不及候

(朱書)
〔四百五拾六〕

同日御同人被仰渡候段、御同人立合御同人被申渡候
一、須藤忠四郎・鈴木一平・柴田一助押込被仰付候^ニ付
右三人碎共押込伺差出候処

御目 見遠慮之格可申渡旨被仰渡候事
二月朔日

〔朱書〕
「四百五拾七」

同年二月三日鵜殿民部少輔殿・松本十郎兵衛殿御達

覚

二月

五日

御中間頭
斧右衛門倅
矢村愛太郎

高橋捨次郎組

御小人

沢木敬三郎

矢村斧右衛門組

御中間目付

岩藤藤左衛門倅

岩藤貫之丞

杉野甚平組

御掃除之者

栄吉倅

村田清太郎

二月

八日

右日割之通於學問所素読吟味有之候ニ付、名改其外相替儀無之
罷出候哉之事

二月朔日

御書面私倅矢村愛太郎儀、病気差合無御座名改不仕御
日限之通差出可申候、且私組御中間目付藤左衛門倅岩
藤貫之丞義者病氣ニ付難罷出旨申聞候

御中間頭

二月四日

矢村斧右衛門

同年三月八日越中守殿被仰渡候段、松本十郎兵衛殿被申渡候

銀三枚

矢村愛太郎

右素読出精ニ付銀子被下之、猶出情可致候

右ニ付為御礼堀田備中守殿・本庄安芸守殿・鳥居丹波守殿・林
大学頭殿・鵜殿民部少輔殿・松本十郎兵衛殿江廻勤

但本多越中守殿江も廻勤いたし候処、当時屋敷類焼ニ付下屋
敷御住居ニ付廻勤不致候

〔朱書〕
「四百五十八」

同年四月十二日

御中間頭江
御小人頭

一、明十三日浜 御成之節講武所江被為 成候ニ付、御注進并附人左
之通

一、御駕籠被為 召候由 御小人方 講武所江

一、数寄屋橋并木挽町五町目橋 附人 同断

右之通講武所玄関奥口江可申込候

講武所

一、御駕籠被為 召候由 浜 御庭江

右之通可被心得候事

四月十二日

海防掛
御目付

〔朱書〕
「四百五十九」

同年八月十三日民部少輔殿・邦之輔殿より御達、翌十四日書面江
下ケ札いたし掛り大浜佐次右衛門返却

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
江

矢村斧右衛門組
御中間
関根三郎左衛門
辰三十七

八月

十六日

小学

十八日

大学
中庸
論語
孟子

廿一日

易經
書經
詩經
春秋
禮記
周禮
儀禮

廿三日

左伝
国語
涑水通鑑
通鑑綱目
史記以下
明史迄

廿五日

文章
時務策

晦日

右日割之通於學問所學問吟味有之候間、朝六ツ時可被罷出候

一、書物之儀者銘々兼而書出置候通右日割ニ見合持參之事

一、着服之儀者上下格以上之倅・厄介迄平服用、羽織格之者并役上下之倅・厄介等者麻上下着用之事

但上下格ニ而引下ケ勤之倅・厄介者平服用之事

一、病氣・痛所等有之候ハ、前日迄者 御城拙者江申聞、且当朝

差掛り候ハ、当人より於學問所拙者共迄可被相届候

但御目 見以下之者者於學問所掛り御徒目付宛ニ而可相届候

一、父母之忌中之者ニ候ハ、三十五日相立候分者当日致月代罷出、

其外忌中・産穢等ニ候ハ、是又致月代可被罷出候、尤幾月幾日

より幾日迄何之忌又者産穢有之段拙者共江可申聞候事

一、改名其外相替儀無之候哉否、下ケ札ニ而明朝迄可被相返候

一、御焼飯被下候事

右之通相心得罷出候様可被申候、依之相達候、以上

八月

鵜殿民部少輔
一色邦之輔

下ケ札

書面之者共、名改不仕相替儀無御座罷出候旨申聞候

八月十四日

御中間頭

矢村斧右衛門

〔朱書〕
〔但其三枚連名ニ而差出申候〕

〔朱書〕

〔四百六拾 四百六拾五与組〕

同年九月七日

一、去月廿五日夜大風雨ニ而居宅吹潰之者休日、半三郎殿被申渡候

但日限之義者去卯十月地震之節之通十五日之積り相心得候様

申上置候
九月七日

(朱書)
「四百六拾壹」

同年九月晦日

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭

篤君御方御広敷江 御入之節、御行列別帳并御道筋別帳之通伺
相濟候、依之申達候事

九月晦日

鶉殿民部少輔
一色邦之輔

御徒 小十人 御小人目付 御徒目付

一組御徒頭 一組小十人頭 御小人目付 御徒目付

奥御小人 伊賀 御挟箱 添番 同
御先乗女中 伊賀 御長刀 添番 同
奥御小人 伊賀 御挟箱 添番 同

御留守居番 御広敷 御用人 奥御医師 御広敷 御用達

御留守居番 御輿 御日傘 御雨傘 御広敷 御用達
御広敷 御用人 御広敷 番之頭 御用達
御広敷 番之頭 御用達

御侍 書役 御輿台 奥火之番 御目付

御侍 御輿台 御数寄屋坊主 御茶弁当 同台 御目付

御侍 御侍 御輿台 御数寄屋坊主 奥火之番 御目付

御徒目付 御小人目付 伊賀 奥御小人 御下男組頭 御徒押

御徒目付 御小人目付 伊賀 御供女中乗物 奥御小人 御下男組頭 御徒押

御小人押 御小人押

御小人押 同勢

御小人押 御小人押

篤君御方御広敷江 御入御道筋

渋谷松平薩摩守下屋敷表門より堀田備中守殿下屋敷・北条美濃
守下屋敷前通り左り江、麻布三軒家桜田町御書院組屋敷・芋洗坂
大久保加賀守下屋敷前通り、六本木通り五島左衛門尉脇・飯倉
町上杉駿河守屋敷四辻より左り江、飯倉町松平右近将監屋敷前西
ノ久保通り左江、相良元三郎屋敷前・木下飛驒守屋敷脇・稻葉
伊予守屋敷前右江、久保町幸橋御門・松平時之助屋敷脇・松平
薩摩守屋敷脇・松平肥前守屋敷前通り右江、日比谷御門・八代洲
河岸通り、辰之口遠藤但馬守屋敷脇前・酒井雅楽頭屋敷脇・御
堀端通り平川御門、右之通候事

辰九月晦日

〔朱書〕
「四百六拾式」

御中間頭江

矢村斧右衛門組

御中間目付

藤左衛門倅

岩藤貫之丞

藤左衛門次男

岩藤為太郎

右明廿五日五ツ時学問所江可被差出候

右之趣越中守殿被仰渡候段相達候、尤病氣差合候ハ、名代之者可被差出候

十二月

鵜殿民部少輔
一色邦之輔

一、十二月廿五日於学問所素読出精ニ付為御褒美銀三枚ツ、被下置

候旨、同日右兩人為届相越候事、右ニ付矢村斧右衛門為御礼廻

(朱線圈)

勤、翌廿六日御用番牧野備前守殿・若年寄衆不殘・「但馬守殿・

越中守殿・安芸守殿・丹波守殿・右京亮殿・御目付衆・御掛り

民部少輔殿・邦之輔殿江罷越候事

〔朱書〕
「四百六十二」

小宮山十郎左衛門屋敷願書二通・絵図面式枚但老枚ツ、袋入七

月六日御月番津田半三郎殿江差出候处、右場所者難相成旨丹波

守殿被仰渡候段、御目付駒井左京殿立合・一色邦之輔殿被申渡

候

ここに挿入図あり (卷末参照)

御中間屋敷願

月番

松平久之丞
津田半三郎

覚

矢村斧右衛門組

御中間

無屋敷

小宮山十郎左衛門

右者牛込山伏町小普請組小笠原弥八郎

支配岩田弥十郎上ケ地別紙絵図面之場

所坪数相応、右之者江被下置候様奉願

候、以上

辰六月

御中間頭

矢村斧右衛門

〔書朱〕 札ケ下

書面十郎左衛門儀天明四
辰年四月御中間江御抱入
被 仰付数年無懈怠相勤
候ニ付嘉永五子年五月御
譜代被 仰付候处、拝領
屋敷無御座候間、去卯年
八拾八歳罷成御奉公七拾
式年達者ニ而相勤候ニ付
屋敷拝領済仕度段奉願候
处、当五月廿七日願之通
屋敷被下候間、場所者見
立可相願旨本庄安芸守殿
被仰渡候段、御目付一色
邦之輔立合津田半三郎申
渡候

(朱書)
「四百六拾四」

二丸御台所脇御長屋御門番
同 新御門番

右御門々々勤番之儀近頃等閑ニ相成候趣一色邦之輔殿被仰聞奉
恐入候次第二候、兼々申渡置候趣念入相心得、以來者御定之勤
番相立不勤無之様可被心得候、尤去月中邦之輔殿御見届品も有
之候処、厚御勘弁を以先者御沙汰無之旨被仰渡候間、難有可奉
存候、此段申渡候、銘々連印之請書可被差出候事

但以來勤番相崩候儀於有之者、急度御沙汰之品も可有之旨被

仰渡候事

辰八月

伊藤新之助
矢村斧右衛門
小野鉄兵衛

二丸両御門番中

私共勤向之儀ニ付度々蒙 御談、其上去月中邦之輔殿御見廻り
之節不行届不念之儀有之候処、格別之思召此度者不及御沙汰段
被仰渡、難有仕合奉存候、右ニ付而者以來御書取之趣厚相心得
御定之通一同相守可申旨被仰渡奉畏候、右御請以連印申上候、
以上

辰八月

病氣ニ付御番 御免願差
出置候ニ付連印不仕候
矢村平吉 印
倉本岩三郎 印
吉沢泰蔵 印
近沢岩五郎 印
高橋政太郎 印
篠崎富五郎 印

(朱書)
「四百六拾五 四百六拾番と組」

丙辰八月廿五日夜大風雨ニ付左之通御届致

御中間居宅吹潰之者申上候書付

覚

川口鋤之助 印
矢沢藤太郎 印
小林徳五郎 印
山田源之助 印

右之者共去月廿五日夜大風雨ニ而居宅吹潰申候、依之申上候、
以上

九月五日

小野鉄兵衛
矢村斧右衛門
伊藤新之助

右御扣共式通九月五日津田半三郎殿江口上添伊藤方詰番ニ而上ル

御中間居宅吹潰之者休日之儀申上候書付

覚

小野鉄兵衛組
御中間
齋藤紀兵衛
同人組
同断
宿所浜町山伏井戸
宿所本郷丸山台町
田中八之丞

宿所父八之丞方同居

同人組

同断

同 鎌作

宿所本郷丸山台町

同人組

同断

山本紋次

宿所小石川極楽水橋戸町

同人組

同断

川合忠三郎

宿所父忠三郎方同居

同人組

同断

同 乙右衛門

宿所小日向服部坂上

同人組

同断

小林金三郎

宿所市ヶ谷月桂寺前

同人組

同断

堀内銀次郎

宿所本郷丸山台町

同人組

同断

林 庄之助

宿所本所北割下水御賄組屋敷

同人組

同断

臼井平太郎

宿所本所永倉町

同人組

同断

福原平兵衛

宿所巢鴨大原町通小石川七軒町

同人組

同断

鈴木豊次郎

宿所下谷山崎町老町目

矢村斧右衛門組

御中間

近藤新平

同人組
同断

宿所父新平方同居

同 仙太郎

宿所巢鴨町

同人組

同断

小宮山十郎左衛門

宿所父十郎左衛門方同居

同人組

同断

同 庄次郎

宿所青山五十人町

同人組

同断

寺山隼太

宿所小石川御簞笥町

同人組

同断

深谷幸蔵

宿所湯島切通シ片町

同人組

同断

内山鎌四郎

宿所父鎌四郎方同居

同人組

同断

同 虎三郎

宿所湯島三組町

同人組

同断

小永井鉄次郎

宿所根津元御屋敷跡

同人組

同断

犬塚清蔵

宿所同断

同人組

同断

井田茂八郎

宿所同断

同人組

同断

野口市次郎

宿所本所菊川町

同人組

同断

石原源太左衛門

宿所深川森下町

同人組

石原政助

宿所根津元御屋敷跡

小宝直太郎

宿所本所松倉町

同人組
同断

小宮山桑三郎

右之者共去月廿五日夜大風雨ニ而居宅吹潰休日之儀相願申候間、依之申上候、以上

御中間頭

九月五日

小野鉄兵衛
矢村斧右衛門
伊藤新之助

宿所父桑三郎方同居

同人組

同 豊作

宿所本所中之郷御中間新町

同人組
同断

八田中五郎

右一通九月五日津田半三郎殿江口上添差出候処、同七日・十五日
休日可申渡旨御同人被仰渡候

宿所本所北割下水

同人組

永井虎之進

〔朱書〕
「四百六拾六ノ上」

安政三辰年七月

宿所北割下水永井虎之進方同居

同人組

竹中虎市

上納金之儀奉伺候書付

宿所本所中之郷御中間新町

同人組

鹿島権十郎

私儀天保十三寅年七月長崎奉行組同心被 仰付彼地江引越候節、初在勤ニ付為引越料金三拾兩拝借被 仰付、於彼地御手当金之内を以年々金三兩ツ、拾ヶ年賦之積、天保十四卯年より弘化三年迄四ヶ年之間壹ヶ年金三兩ツ、都合金拾貳兩上納相濟候処、

宿所本所菊川町四町目

同人組

平島倉次

伊藤新之助組
御中間

田畑門之丞

宿所父門之丞方同居

同人組

同 門太郎

宿所麻布狸穴

同人組

山田源之助

同断

納仕度旨奉願候処、殘金拾八兩之高壹ヶ年金壹分式朱宛四拾八ヶ年賦上納可仕旨伊勢守殿被仰渡、嘉永元申年より昨卯年迄八ヶ年之間年々金壹分式朱宛都合金三兩上納相濟殘金拾五兩之処、正当月御中間頭被 仰付御足高等も被下置格別之儀ニ付、殘金上納相濟候迄者御役中者以来年々金壹兩ツ、上納仕度奉存候、

依之此段奉伺候、以上

辰七月

御中間頭

矢村斧右衛門

覚

元御目付支配無役

當時御中間

木村庄兵衛

御勘定奉行衆

去ル申年より未年迄四拾八ヶ年賦之内老ヶ年分

一、金老分式朱

右者御中間頭矢村斧右衛門儀天保十三寅年長崎奉行組同心被

仰付候節、為引越料拾ヶ年賦之積金三拾兩拜借被 仰付、同

十四卯年より弘化三年迄老ヶ年金三兩ツ、四ヶ年上納相濟、

殘金拾八兩嘉永元申年大御番同心被 仰付候ニ付永年賦奉願候

処、老ヶ年金老分式朱ツ、上納之積被仰渡、同二酉年御台所番

被 仰付候ニ付右金高毎年御金蔵江上納之節、去卯年迄月番拙

者共印形手形を以至上納候処、当月御中間頭被 仰付候ニ付

以来斧右衛門印形手形ニ而月番拙者共奥印致し上納可為致候、

且同人御中間頭被 仰付候ニ付高増上納仕度、別紙之通り相伺

候処伺之通高増上納可仕旨当七月廿六日越中守殿被仰渡候、依

之御金奉行江御断有之候様致度此段申達候、已上

辰九月

松平久之丞

津田半三郎

右庄兵衛父木村十左衛門、元長崎奉行組同心之節金三拾兩拜借

仕、老ヶ年金三兩ツ、四ヶ年上納仕、殘金拾八兩者御目付支配

無役ニ相成候節永年賦奉願候処、弘化五申年十一月十八日願之

通殘金老ヶ年金老分ツ、上納可致旨被仰渡候ニ付、去卯年迄御

目付衆印形手形を以至上納ニ相成候処、当辰八月晦日御中間江御

入人被 仰付候ニ付、以後御中間頭印形手形を以月番之御目

付衆奥印ニ而上納仕度奉存候、此段御勘定所より御金奉行衆江

御断被仰渡可被下候、以上

辰九月

御中間頭

小野鉄兵衛

右之通御中間頭申聞候間御金奉行江御断有之候様致度、依之申

達候、已上

辰九月

松平久之丞

津田半三郎

右一通、外ニ御扣老通者、右之通御中間頭歟申文言除キ候事

一、鉄兵衛組御中間木村庄兵衛上納金之儀ニ付、御勘定奉行衆江御

月番御目付衆より達書・扣共式通り御部屋を以差出ス

一、拙者儀上納金増納之儀ニ付、同断達書・扣共式通御部屋を以差

出ス

九月廿四日

(朱書)
「四百六拾六ノ下」

安政三辰年八月右之通堅紙ニ相認メ別紙入用書付相添差出候ニ付、同九月 日本郷元町小野鉄兵衛役所江巢鴨名主五郎兵衛呼出ニ組組役より願之通申渡候事

御内慮奉伺候覺

一、巢鴨原町貳町目三御組拝領屋敷町入用之儀、年々少し宛たり共相嵩申候而已ニ而致減少候廉者無御座候、右様ニ成行申候而者場末之儀ニも御座候得者貸長屋等相建申候儀も行届不申、依之明地多く 公役・町入用持出しニ相成候儀ニ御座候間、町入用次第ニ相嵩候而者一同難儀仕候次第ニ御座候、私共先年町内世話役被仰渡候ニ付、名主方江も相談シ可成丈町入用省略可致様申聞候得共、私共住居不仕候以前者外ニ地主も住居不仕由ニ而、兎角其節之振合を以何事も私江者不申聞、入用之廉々一向ニ相分り不申候ニ付、先年喜多野省吾殿御勤役中賄役内山金吾江右之次第申入候処、同人より省吾殿江申上候趣ニ而則金吾より名主五郎兵衛呼寄セ、當時者庫四郎江町頭被申付候ニ付、臨時入用者不及申都而之儀町頭江申出差函請可申与申渡候間、左様相心得町内取締方心附可申与申渡候、然ル処其後一向私共江申聞候儀も無御座候、且又三季賄役中江書出申候町入用ニ者、何分何厘何糸迄書出申候得共、聊不正之儀者御座有間敷儀ニ者候得共、疑惑仕候得者割付方者如何様ニも可相成哉、何れニ茂月々勘定之砌私共之内立合押切帳相改メ、且都而請取書等迄相改メ申候ハ、自然取

締方ニも相成可申哉、ケ様ニ申上候茂畢竟一同江抱り申候義ニ御座候之間、私共町内世話役被 仰付乍居何事も等閑ニ致置候様思召候而者奉恐入候ニ付存意之儘奉伺候、尤私共より名主・家主共江申談候而茂以前之風儀押移り、是迄済来候ニ不入事坏与中々屈伏仕間敷哉ニ奉存候間、可相成儀ニ御座候ハ、御頭様方御評儀被成下名主共方江嚴敷御達被成下、何レ町内世話役共江も申渡置候間、右町頭江一々相届勘定之節者立合請可申趣被仰渡被成下候ハ、以御感光私共より名主江精々町入用省略之儀も申談候ハ、自然省略方ニも相成可申哉ニ奉存候間、此段御内意奉伺候

一、当四月七日巢鴨武家屋敷より出火仕候節、入用之儀も一向私共江者不申聞候間何程相掛り申候哉承知不仕罷在候処、寄々承り候得者出火翌日町方同心絵図役之者罷越候節其響応ニ多分相掛り申候由、尤名主共より右入用取集ニ付廻状相廻し候趣故、内々右廻状之写シ隣町より借受披見仕候得者何分不相当之様ニも被存候ニ付、猶又五郎兵衛江方江右入用廉書差出し可申様申遣候処別紙之書面差出申候、末ニ至りハ高之処者相違無御座候得共、惣躰廻状ニ而相廻し候書面与者廉書聊相違御座候、是等者組合・名主共内談仕取拵候哉ニも被存候、兎ニ角右様ニ絵図役之者響応候次第私共者一向弁之不申候儀ニ者御座候得共、御時節柄与申殊更出火跡にて混雑之場江罷越、殊ニ私役之儀ニ御座候得者格別之馳走尊敬ニ茂及間敷哉ニ被存候、右別紙廉書之趣ニ而者御用向ニ託シ酒宴ニ及候様にも被存候、何れニも余り不相当之儀与承知仕候得共此儀者如何御座可有哉、以来近辺出火等有間敷とも難

申、其節ケ様ニ町方同心饗応ニ掛り申候而者、御組屋敷之儀者前書申上候次第ニ御座候得者一同難渋仕候次第第二御座候間、此段も御内意奉伺候、尤両様之次第争而奉願候儀ニ者無御座候間、可然御沙汰被成下候様奉願候、以上

安政三辰年八月

高橋正藏印
内山庫四郎印
小林小伝次印

小野鉄兵衛殿
矢村斧右衛門殿
伊藤新之助殿

名主五郎兵衛より差出候入用廉書之写

当四月七日曉巢鳴町続御鉄炮組より出火之節、ね組当番町并世話番組より割合差出候諸入用左之通り

一、金壹両三分式朱

錢五貫三百四拾文

是者出火之節両地人足御防方拾式人焼場取調之節、絵図役之者都合五人右両度出役之節、酒食賄・供支度代并組合名主出役之者両度ニ而拾五人程賄入用共

一、金壹分

錢壹貫百文

是者出火之節取調場所借受候ニ付席料、其外茶・炭・紙・蠟燭代共

一、錢壹貫貳百七拾貳文

是者人足御改方帰りの節麻裏草履差出ス

一、金貳朱

是者右同断供之者江支度代遣ス

一、金壹分式朱

是者絵図役出役之節調所借受候席料、其外小入用とも

一、金貳分

是者右同断之節同心衆貳人江為菓子料差出ス

一、金壹分

是者右同断之節町年寄供三人江遣ス

一、錢貳貫貳百六拾四文

是者右同断之節雨天ニ付、同心衆貳人江者八町堀迄駕籠差出候

賃錢

一、同壹貫貳百四拾八文

是者右同断茶菓子・炭・紙其外小入用共

一、同壹貫七百文

是者右同断御武家方江引合之節急雨ニ付、大黒傘四本・下駄

五足代

一、金壹兩貳分

是者町火消六番組・八番組・九番組消防相掛り、消札相掛ケ候ニ付右消札差戻之節、纏壹本ニ付式朱ツ、定例差出ス

一、金貳朱

是者右消札相返し候節人足貸支度代共

一、同壹分

是者藤堂和泉守様御人数消防有之、右消札戻之節差出候由

金五兩壹分

錢拾貳貫九百三拾貳文

内貳貫五百文

是者北南人足御改方出役之節湯積料として定例御月番御役

所より御役ニ相成候分引

差引

金五兩壹分

錢拾貫四百三拾式文

不殘錢ニ直し

四拾五貫六百八文

右ヲね組町敷拾ヶ町、惣小間千九百三拾九間五尺四寸ニ割、壹

小間ニ付式拾式匆五分八厘

原町貳町目分、小間貳百八拾壹間四尺五寸

六貫六百貳拾六文

右出火之節出役人足御改

南与力衆

安藤源五左衛門殿

稲沢弥一兵衛殿

同心衆

大久保彦十郎殿

村井伝次郎殿

平野勝五郎殿

秋山鉄五郎殿

北人足御改与力衆

金子兵七郎殿

下村弥助殿

同心衆

板倉九十郎殿

高橋恒五郎殿

山本兵太夫殿

佐野儀右衛門殿

燒失物絵図調之節出役

北同心衆

大芦五郎右衛門殿

桜井平四郎殿

町年寄手代

服部八兵衛

森 幸平

地割方手代

田村善藏

右人足御改之儀者、兼而人数相定り居各替之内、増掛り与申与力・同心衆にて八人相増申、当出火之節者不参之者兩三人程も有之候得ども稔与相分不申候ニ付先定りシ名前申上候儀ニ御座候、左様御承知可被下候、内実取調此段申上候

七月四日

ね組割 廻状

御駕籠町始メ

名主

一、金壹兩三分式朱

当月七日巢鴨町続武家方より出火之節人数御改方絵図出役之節支度代、前金払

一、貳貫三百拾六文

絵図取調跡ニ而差出候支度代・供之心附、いせやはらい

一、壹貫四百六拾四文

同断之節酒六升五合

一、壹貫百文

調所山下宅ニ而蠟燭・紙・墨・茶・米代とも

一、金壹分

同断山下宅席料其外共

一、壹貫貳百七拾式文

人足御改方江差出候草履代

一、金貳分

絵図調之節出役兩人江菓子料

一、同式朱

人足御改方供之者江支度代

一、貳貫貳百四拾八文

八町堀迄駕籠式挺代

一、壹貫貳百四拾八文

絵図調之節茶菓子・炭・紙代

一、金壹分式朱

絵図調所植木屋市右衛門方座料其外共

一、金壹兩貳分 前書之節六番組・八番組・九番組・十番組
總拾貳本江消口札戻し候節遣ス

一、金貳朱 右返し候節人足賃・支度代共

一、金壹分 藤堂様江挨拶ニ遣ス節持參

一、金壹分 繪図役出役之節供之者江支度代

金五兩壹分

錢拾貳貫九百三拾貳文

内貳貫五百文 北御番所より御湯漬料御下ケ之分

差引

金五兩壹分

拾貫四百三拾貳文

辰四月廿八日

ね組世話番役

保坂政右衛門

右之通世話番より割出候間其町々割合高早々取集、前書日限迄
無相違保坂政右衛門方江町内より直ニ持參可被致候、此段御達
申候、已上

辰五月三日

名主

当辰三月十三日曉八半時頃

一、本郷五町目統御持筒頭戸田七内様御組同心仁瓶六郎殿地借御代

官白石忠太夫様手代高島八郎殿居宅より出火、長凡四拾間余、

巾平均拾五間程焼失

同四月七日曉八半時頃

(磨)

一、巢鴨町統御留守居閑播摩守様同心小林万次郎殿地借御鉄炮方田
付主計様御組与力浅野小十郎殿居宅より出火、凡長三拾間余、

巾平均七間程焼失

同七月廿九日曉八半時頃

一、本郷五町目統御持筒頭戸田七内様御組同心稲見熊藏殿居宅より
出火、長凡貳拾五間余、巾平均拾間程焼失

右三ヶ所出火場繪図取調之節相掛り候諸入用、町火消八番組之
内た組・同九番組之内ね組世話番名主共より組合惣町之小間高
江割合候処、巢鴨原町貳町目其外御中間方拝領町屋敷之内江多分
之入用相掛り、拝領地主中銘々及迷惑候趣入御聴、右者出火場
繪図取調入用之儀者兼而被仰渡も有之処、何故右躰多分ニ相掛り
候哉、右者事實ニ候ハ、御吟味ニも可相成次第ニ付、委細取調可
申立旨御沙汰有之奉恐入候、依之右出火場町々世話番名主共一
同打寄得与取調仕候処、ね組世話番巢鴨町名主政右衛門より右
出火繪図取調之節、炭・茶・蠟燭・筆・墨・紙等之内江外入用
を認込候而巢鴨原町貳町目名主五郎兵衛方江相廻シ候処、同人義
何心なく其儘右書付を前書巢鴨原町貳町目御中間方拝領町屋敷
小間割合差出候由、此廉書之内ニ者前段申上候通繪図入用ニ無之
分迄茂書載、殊ニ品々書損有之、亦た組町々江割合候出火繪図取
調入用式タ口之内ニも外入用認メ入有之候を、是又同組世話番
名主共より其儘ニ而小間割合ニ差出候由、右外入用迄町々拝領地
主中より出銀為致候而者以之外之次第ニ付、右出火入用小間割合
之儀者全書損有之候間出銀ニ不及趣、右拝領地主中之内江厚詫入
候而、右書損割合書付者取戻候得共、素より出火場繪図入用等多
分ニ相掛ケ候儀ニ者無之筋ニ而、書損与者乍申今般之次第全不調

法至極一同重々奉恐入候、此上厚く申合炭・茶・蠟燭・筆・墨・紙等之外聊成共無益之入用不相掛様取計、拝領地主中江聊迷惑不相掛様取締方仕候間、前書五郎兵衛始世話番名主共不束之取計仕候段、格別之御憐愍を以御有免被成下置候様た組・ね組町々名主共私共迄歎願仕候間、何卒御慈悲之御沙汰偏ニ奉願上候、已上

右組之世話掛

小石川白山前町

名主

辰十月

房次郎 印

湯島町

同

六右衛門 印

長谷川町

同

鈴木市郎右衛門 印

右一通者町方名主共より町奉行所江差出候写

此一通者町方名主共より御中間頭宛差出候写

差上申一札之事

一、当三月十三日本郷五町目続御組屋敷・同四月七日巢鴨町続御武家方・同七月廿九日本郷五町目続御組屋敷右三ヶ所出火之節、町方南北人足改御役人方御出役之砌出火場絵図調之節品々入用相掛、右入用た組・ね組共組合惣町江割合候ニ付御拝領之地主様方右入用御調有之、各々様方江入御聴奉恐入候、右惣町江割合候儀者全心得違ニ付、以来武家方・町方共出火有之候節右様之入用聊たりとも一切相掛ケ申間敷候、猶此上右様之義有之候

八、何様被仰立候共一言之儀申上間敷候、為後日差上申一札仍如件

安政三辰年九月

町火消八番組之内

た組

本郷四町目

名主

又右衛門 印

同所菊坂町

金蔵 印

同所元町

六右衛門 印

同所一町目

弥兵衛 印

同所菊坂台町

太郎右衛門 印

同所五町目

源右衛門 印

同所菊坂田町

長左衛門 印

同所九番組之内

ね組

巢鴨町

政右衛門 印

同所原町老町目

善蔵 印

同所同町式町目

五郎兵衛 印

小石川七軒町

新七郎 印

小野鉄兵衛様

矢村斧右衛門様

伊藤新之助様

右町奉行江差出候方并御中間頭宛差出候方両様之趣、組々町頭ども江三組々頭より十月廿四日申渡候事

当三月十三日本郷附木店出火・同四月七日巢鴨町出火・同七月廿九日本郷附木店出火有之候節、絵図調入用多分相掛り候ニ付以来減方致度旨申立候処、町々名主江申渡之品有之嚴敷取締も相立、以後大縄町屋敷近辺出火之節入用相掛ケ申間敷趣ニ付為心得相達候、右ニ付町々名主共より町奉行所江差出候一札之写共相添順覽差出申候、銘々承付之上可被差返候

御中間頭

伊藤新之助
矢村斧右衛門
小野鉄兵衛

三組

町頭中

然不都合之儀も出来可申候間厚心得、五拾三間御馬相廻之節ニ不限、御馬牽人被召出候節々等閑之心得方無之様可致候、且又諸出方等之節、御馬牽人ニ付牽人三人懸ニ而可相勤場所も申合ニ而差略等致し候趣、場所揃杯与申儀も可有之哉之相聞如何之事ニ候、畢竟右様之心得方故此度御沙汰も有之、於拙者ニ茂恐入候次第、以後者かたく相慎触面之通御厩向江無不參相揃、申合之差略等者決而無之様可被致候、右申渡候故ニも等閑之心得方於有之者嚴重ニ取計可申候、此段御馬牽人ニ罷出候役々江不洩様可申渡候

九月

御供組頭中

伊藤新之助
矢村斧右衛門
小野鉄兵衛

(朱書)
「四百六十八」

申渡書面写并御旗指之者・定番之者勤書写

辰九月

当月十七日五拾三間御馬相廻り候節、牽人不參多ニ而口附之者兩人罷出候而已、右者如何之事ニ候、人数不廻候哉、此儀表向及沙汰候而者役々及迷惑候儀も可有之間内々申談候ニ付、篤与相糺否可申聞旨伊沢兵庫頭殿被仰渡、甚以恐入候次第ニ而候、表向御沙汰有之候而者銘々身分ニも拘り候程之儀ニ付、厚ク御勘弁被成候様歎願申上置候処、此度之儀者先勘弁可致、以後右様之様於有之者不及内沙汰直ニ御目付江申談嚴重ニ取計可申間、此段相心得役々江可申渡置旨被仰渡候、就而者役々心得方不行届故自

諏訪部弥三郎御預
御既定番之者

式拾四人

一、平日当番隔日ニ罷出 西丸様 御乗馬其外都而御馬御用有之候節、牽人相勤申候

一、諏訪部弥三郎所御既定番之儀者両山 紅葉山并遠 御成之節、御供御馬牽人相勤申候

一、御城内御厩近辺出火之節欠附前同断

九月

代島新助
池田栄之助
山形権之助
印
印

御旗指役之者百拾人

權現様御旗指之者 五拾五人、台徳院様御旗指之者 五拾五人

右者慶長拾五年

權現様駿府江被為 入候節五拾五人者駿府江御供仕候

台徳院様御入五拾五人江戸表江残居候、然ル処泰平之 御世ニ相

成候ニ付御旗指之者勤番無御座候ニ付上野 御宮番人相勤罷在

候処、右番人御免ニ相成候儀年号月日不相知、右ニ付又候勤番

無之候ニ付頭取迄勤場所相願候処

殿有院様御代承応三年、諏訪部文九郎御預御厩江日々御中間四拾

三人宛相詰候内、御旗指之者日々拾八人ツ、御雇ニ罷出相勤候

処、享保八卯年以來諏訪部文右衛門方江拾人、稲垣軍平方江六

人宛相詰可申旨御目付三宅大学被申渡相勤罷在候処、其後年号

月日不相知御番御馬為立替、西丸下御厩・雉子橋御厩右両所江

日々罷出相勤罷在候、并ニ御厩使等相増、只今ニ而者仕役同様ニ

相成 御成之節も六人宛御供御馬口附之者ニ罷出相勤罷在候、

且又四ヶ所御厩多人数出方之節者惣出仕相勤罷在候

大猷院様御代御旗指之者五拾五人 御上洛并ニ日光 御参詣之

節者三拾八人、外ニ組頭四人、御先御行列 御代々相勤来申候、

尤 御宮 御参詣之節も御先練り相勤申候

例年紅葉山并両山御規式 御成之節御曠熨斗目頂戴仕御先御行

列相勤申候、右熨斗目年々頂戴仕来候処、弘化元辰年より隔年

ニ頂戴被 仰付候、駒場野 御成之節者 御塵御用三人 追

鳥狩之節者御招御用五人、右者御鳥見組頭任差図相勤申候

徳松君様御幟建之節、御旗指之者江麻上下・麻黄帷子頂戴仕、御

旗奉行任差図勤番仕候処 御近代者小普請方江被 仰付候

御城近辺出火之節者 御本丸御小納戸為御用不残駆附相勤申候、

其節者御厩向江者相勤不申候

浚明院様御代安永五申年四月日光 御参詣之節も古来之通御供仕

候

慎徳院様御代天保十四卯年四月日光 御参詣之節も古来之通御供

仕候、近年四ヶ所御厩定番之者定人数不絶不足勝ニ而過行、昼

番役も 享保度以来者九拾人程も有之候処当時者 御城勤之

方江多御用除相成、御厩勤昼番役者四五人程ニ相成、尤大組ニ而

者老人も無之候儀ゆへ、右両役之人数不足之分御旗指方より持

込勤ニ相成、自然御用多ニ相成相勤罷在候、小組之儀者

台徳院様御代より

殿有院様御代万治元戌年虎之御門番人相勤罷在候処、右御門番人

同年ニ御免ニ相成、其後年号月日不相知而 御丸御長屋御門番

人被 仰付、年号不知

有徳院様御代享保初メ之頃迄六拾年余相勤、然ル処右御長屋御門

番之頭鈴木八兵衛儀御中間頭役相願候処、願之通持高八拾俵ニ

而被 仰付、是より御中間頭三人ニ相成、其後年号不知畔柳

助九郎・大岡源右衛門右両組之内、御旗指之者明跡江七人分小

組之方ニ割込被 仰付候、尤勤向之儀者而御組之通相勤申候

右之通御旗指一同相勤罷在候、以上

安政三辰年 月

石島鉄五郎 印
小野惣八 印
太田又八 印

(朱書)
「四百六拾九」

安政三辰年十二月

以書面奉願候

一、当御長屋御門之儀者、是迄御手当等も無御座候得共同役共申合相勤続仕候処、西丸御締り相成候後追々難渋ニ相成一同当惑仕候、依之不顧恐奉歎願候間、何卒格別之思召を以西丸御開キ相成候迄勤続出来仕候様、御憐愍之御沙汰被成下候者難有仕合奉存候、此段偏ニ奉願候、已上

辰十二月

二丸御長屋御門番

中村啓之丞

有賀伊三郎

三橋嘉一郎

野々村肱助

小野悦之進殿

矢村斧右衛門殿

伊藤新之助殿

右願書差出候ニ付、三組申合之上盆暮金三百疋ツ、遣し候様取極メ候

(朱書)
「四百七拾」

安政四巳年二月十六日

黒鍬之者頭

御掃除之者頭江

御中間頭

御小人頭

西丸明 御殿御預ケ被 仰付候ニ付而者火之元取締等之儀精々

(朱書)
「四百七拾壹」

安政四巳年四月鈴木四郎左衛門殿御下ケ

御目付中

御書院番頭

(不脱カ)

心附候様去丑年相達候趣も有之、何レも相心得罷在候儀ニ者可有之候得共、明 御殿之儀ニ付若心得違之者も有之自然心緩等出来候而者以之外之事ニ候間、向後厚相心得候様安芸守殿被仰渡候ニ付 御殿向 御城内向共繁々見廻り、諸役所部屋々々等火所無之場所ニ而も兼而見廻り之御徒目付・御小人目付相心得、猶精々心附不行届無之様可致候、依之相達候事

但御城内御番所之支配向并達置可然向々江者相達可申事

二月十六日

松下大学

拙者共泊所脇井水汲取之儀、前々より別紙之外者一切為汲申候処近来猥ニ相成、中ノ口下部屋有之分其外何方江なく断も無之日々汲来自然御玄関前往来も猥ニ罷成、且者不取締之筋も有之間敷とも難申、尤近来省略ニ付拙者共より差出置候張番足輕為引候処前文之通不取締にも罷成候間、猶又来ル十九日より如以前張番所取締番人差出置精々相制候筈ニ有之候得共、中之口其外下部屋有之分江右井水汲取間敷旨各々様方より被仰渡可被下候、中之口部屋々々ニ而前々汲来候井戸御普請中差支候節者是迄各様方より御断有之右御普請中為汲候儀ニ御座候、然ル処近来猥ニ罷成諸向より汲取候ニ付釣瓶痛損多く、此節者日々之ことく釣瓶請取御断も差出御入用ニも相響き候事ニ候、右御掛合

旁得御意候、御承知之有無御下ケ札ニ而承知致し度候、已上

四月

御書院番頭

御目付中

追啓、諸向より各様旁を以相断候共、古来より汲来候別紙之外者一切不相成候間是又兼而御心置可被下候、已上

大御番頭 御小性組番頭 両組頭 当番所 御使之者組頭

御小人目付 御数寄屋

右之外一切井水汲取候儀不相成候事右当番所岩瀬繁三郎より相達ス、承付之上御徒押江相廻ス、右之段御中間目付江相達ス、御持鎗之者并ニ御長屋御門番之向ニ而者右井水相用不申候趣ニ候得共、為念相達置候

四月十四日

安政四巳年四月十八日御書院番頭泊所脇井戸汲取度儀ニ付、左之通鉦藏殿江差出ス

御書院番頭衆

御中間

御持鎗之者部屋

御長屋御門番

御駕籠之者部屋

右部屋々々ニ而先々汲来候井戸之儀、中之口内ニ有之汲罷在候由之処、右井戸先年潰候後年月不相分御書院番頭衆泊所脇井戸汲取罷在、猶又嘉永四亥年六月改而御達申上同所井戸汲来候処、此度改而前々汲来り候役々之外難相成旨御掛合有之、難汲取相

成候而者右部屋々々日々差支罷成、且又御中間御持鎗之部屋之儀も前々同所井戸汲来候ニ付、嘉永四亥年改而御達者不仕候得

共外之品共違ひ必至与差支候間、可相成者是迄之通右部屋々々ニ而為取汲候様仕度、此段奉願候、已上

巳四月

御中間頭

御駕籠之者頭

右之通御中間頭・御駕籠之者頭申聞候間及御掛合候、已上

巳四月十八日

野々山鉦藏

一、昨十八日鉦藏殿江差出候役々井水汲取方之儀、表立掛合ニおよび候而者差支も可有之趣を以、当番所依田源十郎より番頭出役豊前守江掛合相濟候之間、是迄井水汲取候様源十郎申聞候間、其段榮佐ヲ以夫々江申渡候

四月廿日

〔朱書〕
「四百七拾式」

安政四巳年閏五月

御目付衆

御納戸頭

今般別紙伺之通可取計旨但馬守殿被仰渡候ニ付、其御向、月々又者壺ケ年何度与相定、御請取物之儀御差支無之分者此度元御断御改御進達可被成候、左候得者御進達已前下書ニ而此方江為御見有之候様致し度、別紙相添此段及御掛合候

巳閏五月

御納戸頭

伺書写

諸向定式渡物御断物之儀ニ付
相伺候書付

深尾善十郎
戸田嘉十郎

諸向定式渡物之儀、月々或ハ壺ケ年何度与相定り、其向々より
申上候御断書御下ケ之上渡方致来候処、同様之御断書都度々々
ニ御下ケ却而調之混雜致シ候間、差支無之向者此節元御断相改
申上候書面御下ケ相成、右御断面ヲ以向後渡し方取計候様致し
度、尤先前より元御断ニ而渡来候向も有之候間簡易ニ御用相弁、
乍少多当帳・筆・墨・紙等自然減方ニも相成候間、右之趣御勘
定奉行江も相談候処存寄無之旨申聞候間此段相伺申候、伺之通
被仰渡候ハ、私共より向々江掛合可仕奉存候、已上

閏五月廿四日

深尾善十郎
戸田嘉十郎

(朱書)
「四百七拾二」

安政五年正月

覚

矢村斧右衛門組

御中間目付

山崎友太郎

右友太郎儀長崎表江在勤中久々病氣之処、養生不相叶去已十二
月廿五日於彼地病死仕候旨父市十郎より相届申候、依之御届申
上候、已上

正月廿一日

御中間頭

矢村斧右衛門

同年二月晦日

御目付江

(ママ)
御小人目付
山崎友太郎

右長崎表江為御用罷越候処病死ニ付御手当銀式枚被下候間、御
納戸頭相談可被取計候
右遠藤但馬守殿被仰渡候段、御目付市橋伝七郎立合神保伯耆守被
仰渡候

(朱書)
「四百七十四」

安政四巳年六月廿七日

御中間押込伺

覚

野々山鉦蔵

矢村斧右衛門組

御中間目付

河野貫作

右貫作養方叔父河野泰次郎儀、此度跡部甲斐守方江被 召捕候
処、昨廿六日同人於御役宅揚屋江差遣候旨同人組与力中島三郎
右衛門申渡候、依之貫作儀押込置可申哉奉伺候、以上

六月廿七日

御中間頭

矢村斧右衛門

押込伺江御附札

番遠慮可被申渡候

右右京亮殿被仰渡候段、四郎左衛門殿立合鉦蔵殿被申渡候

六月

同断貫作倅貫一郎身分伺御扣共三通駒井左京殿江差出候処、後刻不及差出旨右京亮殿被仰渡候趣ヲ以左京殿御下ケ、尤右様之身分伺不及差出事ニ者候得共、以後迎も伺書者矢張差出候様被仰聞候旨御部屋より申聞候、右伺書左之通

御中間身分之儀奉伺候書付

駒井左京

覚

矢村斧右衛門組

御中間

河野貫一郎

右貫一郎父河野貫作儀昨廿七日御番遠慮被仰付候ニ付、貫一

郎身分之儀奉伺候、已上

六月廿八日

御中間頭

矢村斧右衛門

安政五年二月十七日右書面御扣共三通御当番鉦藏殿江差出候処、後刻御附札ヲ以右京亮殿被仰渡候段彈正殿立合鉦藏殿被仰渡候、右伺書左之通

御中間目付番遠慮被仰付罷在候者此上之儀奉伺候書付

覚

矢村斧右衛門組

御中間目付

去巳六月廿七日番遠慮被仰付罷在候

河野貫作

右貫作養方叔父河野泰次郎儀江戸拾里四方追放被仰付候ニ付、貫作此上之儀奉伺候、已上

二月十七日

御附札

番遠慮可被申渡候

御中間頭

矢村斧右衛門

同断貫作倅貫一郎儀身分伺御扣共三通金三郎殿江差出候所御目見遠慮之格可被申渡旨酒井右京亮殿被仰渡候段、駒井左京殿立合都筑金三郎殿被申渡候

御中間身分之儀奉伺候書付

都筑金三郎

覚

矢村斧右衛門組

御中間

河野貫一郎

右貫一郎父河野貫作儀、昨十七日御番遠慮被仰付候ニ付貫一郎身分之儀奉伺候、已上

二月十八日

御附札

御目見遠慮之格可被申渡候

御中間頭

矢村斧右衛門

同五年三月廿一日右京亮殿被仰渡候段、御目付都筑金三郎殿立合鈴木四郎左衛門殿被申渡候、書面ヒレ付返上

御目付江

御中間目付

河野貫作

番遠慮可被差免候

御目見遠慮之格可被差免候
御中間
河野貫一郎

配向惣躰糺之事

四月

鶉殿民部少輔

(朱書)
「四百七十五」

同年三月十八日

御徒目付組頭江

近々遠中島調練場江 御成御沙汰ニ付、若近辺出火之節者永代
橋脇御上り場ニ有之候御座船越中島江相廻し、同所より御船ニ而
永代御船御番所前、夫より 御成御船道之通相心得、尤兩御
番寄場之儀者同所御溝廻り相詰候得共、御替道并御先手寄場廻
り場所等之儀者前々深川筋 御成之節之通相心得可申候哉此段
奉伺候、同し通被仰渡候得者御先手御船江者私より申達候様可
仕候、右之通但馬守殿江伺相濟候ニ付依之申達候事

三月十八日

鶉殿民部少輔

(朱書)
「四百七十六」

安政五年四月右書面一通当番所より差越候ニ付、左之通下ケ札

致し御徒押江相廻ス

御徒目付組頭江

近々神奈川筋江 御成御沙汰有之、程遠之場所ニ付御供方於御
途中ニ代合有之候積り取調、御供建罷出人数割差支無之候哉支

札ケ下

御書面之趣組々相糺候処、可成御間ニ合可申候

四月

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

(朱書)
「四百七十七」

安政五年五月

但馬守殿被仰渡候

覚

金三百疋

同拾兩

御中間御供組頭

五人

御馬牽人

百式拾老人

右之者共深川越中島調練場 御成之節并稽古之節之御馬差添罷
越候ニ付被下之

(朱書)
「四百七十八」

同五年二月右書面御扣共三通・例書一通添月番鉦藏殿江差出ス

御中間大繩屋敷取戻之儀
奉願候書付

覚

月番 野々山鉦藏
市橋伝七郎

拝領大縄町屋敷
本郷春木町貳町目 五拾五坪貳合
御代官 松永善之助

右善之助儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上ケ地ニ相成申候、
右者御中間大縄屋敷ニ御座候間先格之通御中間組江御返被下候
様奉願候、已上

午二月

御中間頭
小野悦之進
矢村斧右衛門
伊藤新之助

例書

御徒押
高部市藏

右市藏儀此度武士地拝領被 仰付町屋敷上り地ニ相成候処、御
中間大縄屋敷ニ付天保十四卯年十月取戻之儀申上候処、同年十
二月五日願之通元組江御返被下候旨安芸守殿被仰渡候

午二月

御中間頭
小野悦之進
矢村斧右衛門
伊藤新之助

御勘定奉行衆

元拝領町屋敷本郷春木町貳町目
五拾貳坪五合
御代官 松永善之助

右者先達而武士地拝領有之候ニ付、元拝領町屋敷之儀者御中間大
縄地之内ニ御座候間、先前之振合ヲ以元組筋江取戻願進達仕候
而も御差支無御座候哉、此段御勘定奉行衆江御掛合被下候様仕
度奉存候、已上

午二月

御中間頭
小野悦之進

右之通御中間頭申候間及御掛合候、以上
午二月

矢村斧右衛門
伊藤新之助
野々山鉦藏
市橋伝七郎

△

御書面之趣致承知候、大縄町屋敷元組筋江取戻之儀
差支無之旨松永善之助申立候、此段及御挨拶候
午二月 永井玄蕃頭

一、右善之助儀去辰年十二月武士地拝領被 仰付候ニ付、本郷春木
町大縄拝領之儀者上地願差出置候処、数月相立候得共町奉行所
江引渡之手続ニ相成不申候ニ付、午二月八日御勘定奉行衆江掛合
書面差出、同十日下ケ札挨拶之上、未町奉行所江引渡ニ者不相
成候得共取戻願差出申候、其後五月十日町奉行所江引渡弥上ケ
地相成候処、未取戻願も不相濟候ニ付御目付野々山鉦藏殿江御
催促申上候処、右御右筆所ニ而書面不相見候ニ付書直差出候様
被 仰聞候間、五月廿日認メ直差出置申候処、六月十九日右願
書面江御書取相添右京亮殿被仰渡候段、御目付野々山鉦藏殿立
合市橋伝七郎殿被申渡候

御書取写

覚

可為願之通候、尤町奉行江可被談候

同年六月廿五日右書面一通伝七郎殿被遣候旨ニ而、御徒目付組頭
より相達承付返却

市橋伝七郎殿

伊沢美作守

拝領大縄町屋敷本郷春木町二丁目
五拾五坪式合

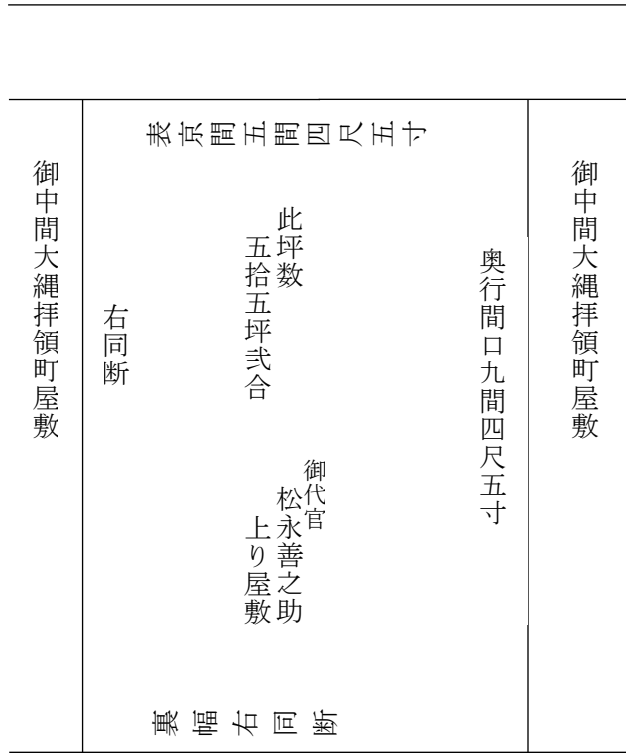
御代官
松永善之助

右善之助町屋敷元組江被下候間御引渡可申候、依之明廿六日
四時晴雨とも請取人・立合之者右場所江御差出可被成候

六月廿五日

御中間頭
矢村斧右衛門承之

此書面程村紙ニ相認六通り印紙ニ而差出候由、組役之者申聞候事



右松永善之助拝領町屋敷先達而上ケ候处、右者御中間大縄町屋敷ニ付元組江被返下候間今日各方御出、間数・坪数御改御渡被

成、右絵図面之通無相違請取申候、為後日仍而如件

安政五年六月廿六日

請取人 和田卯十郎 印
御中間組頭
矢村斧右衛門組

立合 水野九郎兵衛 印

村井幾次郎殿
谷村源右衛門殿
町年寄中
樽屋三右衛門殿

右者昨五日町奉行伊沢美作守より達之通受取として組之者差出、別紙名前之者罷出双方立合之上受取渡相濟候旨卯十郎・九郎兵衛相届候

伊沢美作守組与力	同組年寄同心
村井幾次郎	大芦喜祖右衛門
同組年寄同心	地割役
人見周助	樽屋三右衛門
石谷因幡守組与力	町年寄手代
谷村源右衛門	太田条助
地割手代	藤木造酒蔵
中野喜兵衛	

同年六月廿七日同役伊藤新之助詰番ニ而御部屋宗達を以差出ス

覚

御代官松永善之助元拝領大縄町屋敷上り地御中間元組江御返し被下候ニ付、昨廿六日町奉行伊沢美作守組与力村井幾次郎・石谷因幡守組与力谷村源右衛門より請取候旨組役之者相届申候、依之申上候、以上

六月廿七日

御中間頭
矢村斧右衛門

〔朱書〕
「四百七拾九」

同年八月五日

御目付江

御目付支配無役
用役勤仕並

松山啓一郎

右、御代官白石忠太夫手附出役来ル戌年迄相勤候様可被申渡候、
尤御勘定奉行江可被談候

右但馬守殿被仰渡候段御目付鉦藏殿被申渡書面ヒレ付返上、右之
趣世話役池永池次郎江達相濟、伊藤新之助筋御中間無役ニ付翌六
日同人宅ニ而申渡、引渡濟之申上も御中間頭江被差出候事

八月五日

〔朱書〕
「四百八拾」

安政五年八月

黒楸之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

江

御出棺迄之内急事之節御供立之儀者 御在世之時分 御成之
節御供立之通相心得、早速御玄関江相揃西桔橋江可相廻候

八月

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

御出棺 御葬送并 御靈屋 御宝塔御遺物

御用、御法事惣奉行

和泉守殿

御出棺 御葬送御遺物御用

越中守殿

同年八月

黒楸之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠頭

江

一、御出棺御当日御供ニ而 御殿江相揃候面々江御台所被下候間、人
数書取調可差出候事

八月

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

御出棺之節御供之面々揃刻限 御出棺御刻限より一時早メ相
揃候事

但 御城江相揃北桔橋外江相廻候節御供之同役引纏相廻候事

一、北桔橋外江相廻候御供之面々、御刻限迄者竹橋御門張番所・清
水御門大番所并張番所江集り居可申候事

一、御供建場矢来御門外、上野御先ニ而者仮矢来御門外御供相開候
事

一、御供之面々同勢者 御出棺御刻限以前神田橋内新道より酒井左衛門尉屋敷前迄集居、夫より御跡ニ付而引申候、御先ニ而者下谷弁天前通新清水口之方江差置、尤御徒押・御小人押差引致シ候事

一、御先勤并勤番之面々末々軽キもの・又者迄御湯漬被下候、且又御法事中相詰候面々末々軽キ者迄朝夕御賄被下候、昼夜相詰候面々江者朝夕夜共御賄被下候、尤御賄料觀成院ニ而被下候事
但本坊ニ部屋割有之候分者同所ニ而被下候事

一、御出棺御当日北桔橋外江御供相廻候儀者、御刻限より半時早メニ相廻候事

一、御出棺之節万一途中ニ而雨降出し候ハ、御供之面々江傘相渡候儀、御先・御供之分者一役壺人ツ、相下り請取候様、小雨ニ茂候ハ、御供之同役ども故見計相渡候事

一、御出棺御供之面々上野 御入棺 御葬送之御規式相濟候ハ、退散之事

右之通伺相濟申候、依之申達候事

八月十二日

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

午八月十三日久之丞殿被遣

御徒目付組頭江

御葬送之節御供并御先勤之者・御法事中出役之者江被下候間、
人数書早々可被差出事

但御葬送之日者一日家来末々迄、御法事中者泊り有之候分計

上下共被下候

八月十三日

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

同年八月

此度 御新葬御法事ニ付而者、御道筋并御道固之大名且御法事中勤番・火之番等之下陣江支配向之者等相越候節、食事被振舞別段贈り物も有之哉之由、自然入費も不少趣相聞候ニ付、取締方之儀可申達存候処、和泉守殿無急度御沙汰も有之候間、右ニ付御用掛り并出役且頼之者等江者贈り物之儀も全先方より之心入ヲ以仕来被任セ、差贈り候品受納可致分者格別之儀、夫迎も此方より申入候様之事有之候而者御外聞ニも相拘り候間毛頭有之間敷事ニ候、尤食事之儀も前々より之振合有之候共、御用中御賄も被下候事ニ有之上者、彼方より之振舞ケ間敷儀者堅相断決而受用申間敷候事、右之通相心得可申候、若如何敷儀も候得ハ拙者共江可申出旨諸家江相達置候、其段和泉守殿江も無急度申上置候間此段も申達置候事

八月

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

同年八月十七日

御中間頭
御小人頭 江
御駕籠之者頭

御出棺 御葬送御供 建場・開場絵図面并御行列書・御道書共
伺相濟候間申達候、一覽之上明日中可相返事

八月十七日

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

十八日
御出棺ニ付御供書

御出棺御供

御中間頭
矢村斧右衛門
御小人頭
高橋捨次郎

御葬送御供

御中間頭
伊藤新之助
御小人頭
伊佐由兵衛

同年九月三日

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

来ル六日上野新 御廟所江 御参詣、御行列者無之候へ共 御

轅ニ而候間白下着、其外 御轅之時之通相心得可申事

一、亀井坊可被差出候

右之通相達候事

九月三日

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

御徒目付組頭江

上野新 御廟所江 御参詣之節、殿中諸合之面々御座敷内ニ而
(詰カ)
御目見并着服之儀、都而両山 御参詣之節之通候事

九月三日

名前同断

安政五年九月四日右老通左中殿御下ケ、ヒレ付返上

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

上野新 御廟所江 御参詣之節、御駕籠台より御定式御道筋

御装束所江被為 成、御同所より 御轅ニ而 御参詣相濟、

御装束所江被遊 御立寄、夫より 還御之積り相心得、御

供方其外勤番大名 御目見場所等之儀者諸事天保十二丑年三月

上野新 御廟所江 御参詣之節之通ニ候事

九月四日

松平久之丞
津田半三郎
駒井左京

同月五日右一通絵図面添弾正殿御渡シ被成候、書面ヒレ付返上

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭
江

上野新 御廟所江 御成之節御供方并御先勤之面々御定式 御

成之節之通申談、詰衆・高家等之予参無之積り相心得 御装束

所江被遊 御立寄 御轅ニ被為 成候節御供建場・開場之儀別

紙絵図面之通相心得候事

右之通伺相済申候、依之申達候事

九月五日

名前同断

(朱書)
「四百八拾壹」

安政五年十一月廿五日

御中間頭江

一、明六日上野新 御廟所江 御参詣之处、少々 御頭痛氣ニ付御
延引被 仰出候旨当番所周蔵相達候事

九月五日

御台所湯方釜櫃御修復ニ付御台所口外江右仮物取建候ニ付、昼
夜共見廻り、別而夜中者繁々心付候様新土戸御門番江可被申渡
候事

十一月廿五日

松平久之丞

御徒目付組頭
火之番組頭 江

御法事相済候而も 御尊牌中堂ニ被為 在候内者下乗所・下馬
所之儀 御法事中之通相心得可申候

右之通伺相済申候、依之申達候事

九月

名前同断

右書面御扣共三通

但馬守殿

臨時

御挑灯奉行江御断

松平久之丞

一、御法号明十日御支配向江御渡相成候間、其心得ヲ以出勤可致旨

当番所中村源七郎相達ス

但御先例服沙小袖麻上下之旨同人申聞候事

九月九日

一、箱御挑灯

壹張

一、蠟燭

下拾五匁掛 日々壹挺ツ、

右者御台所湯方釜櫃御修復ニ付、新土戸番人夜中繁々為見廻候
様昨廿五日被仰渡候ニ付書面之通為請取申度、尤蠟燭之儀者御
用相済御返断之仕候迄日々壹挺ツ、為請取申度奉存候、御挑灯
奉行江御断被仰渡可被下候、已上

家定公
御法号
温恭院様
右小広間おゐて拝見被 仰付候事

九月十一日

午十一月

御中間頭
三名

但馬守殿

御中間御手当奉願候書付

覚

松平久之丞

御中間

新土戸番

八人

右者御台所湯方釜檀御修復ニ付御台所口外江右俵物取建有之候ニ付、昼夜見廻り別而夜分者繁々心付候様被仰渡候処、右番人定式式人勤番ニ而者手足不申候間、老人増泊申渡不寐勤番罷在候ニ付、乍少分雜費相掛り少給之者難渋仕候間、可相成儀ニ御座候ハ、相応之御手当被下置候様仕度奉願候、尤天保十亥年十一月中同所御修復中見廻り候ニ付御手当扶持被下候例書相添、此段奉願候、以上

午十一月

御中間頭

小野悦之進

矢村斧右衛門

伊藤新之助

右御扣共三通・例書尙通添久之丞殿江差出ス

例書

覚

新土戸番

右者天保十亥年十一月中湯方釜檀御修復中、増泊り見廻り相勤候者老人江老人半扶持ツ、之積り、一日老人七合五勺ツ、勤日数ヲ以御修復中御手当扶持被下候間、翌子年五月廿九日肥後守殿御書取ヲ以被仰渡候

午十一月

御中間頭

〔朱書〕
〔四百八拾弍〕

安政五年十二月十九日右御書面但馬守殿被仰渡候段、伯耆守殿被遣当番所組頭齋藤直蔵より達有之、即日斧右衛門為差引罷越

御中間

御代官

佐々木道太郎手附出役

浅井左一郎

右只今黒川左中宅江可被差出候、若病氣ニ候ハ、名代可被差出候

御中間組頭

清水清兵衛

左一郎差添

御中間

吉沢峰松

左一郎名代

岩藤乙次郎

右之通罷出候処左之通被仰渡候

御目付江

御中間

御代官

佐々木道太郎手附出役

浅井左一郎

安房・上総・下総国村々漆・楮植付地所改として出役之節不正之取計致し不埒之至りニ付、役儀取放御目付支配無役押込被仰付候

右之通可被申渡候

十二月十九日

右但馬守殿被仰渡候段、黒川左中殿於御宅加藤正三郎殿立合左中殿被申渡候、即夜右名代之者無役世話役山崎嘉吉江引渡申候

佐々木道太郎様

矢村斧右衛門

以手紙啓上仕候、然者拙者組御中間御手附出役浅井左一郎儀、今十九日別紙之通但馬守殿被仰渡候段、御目付黒川左中於御宅加藤正三郎立合左中申渡候、依之別紙御書付写老通相添為御心得御達申候、已上

十二月十九日

矢村斧右衛門様

佐々木道太郎

御手紙致拜見候、然者貴様御組拙者手附出役浅井左一郎儀、今十九日御別紙之通但馬守殿被仰渡候段、御目付黒川左中於宅加藤正三郎立合左中申渡候ニ付、為心得御達之趣致承知候、已上
十二月十九日

御部屋江申上候書面左之通

覚

矢村斧右衛門組

御中間

御代官

佐々木道太郎手附出役

浅井左一郎

右左一郎儀安房・上総・下総国村々漆植付地所改として出役之節不正之取計致し不埒之至リニ付、役儀取放御目付支配無役押

込被 仰付候旨但馬守殿被仰渡候段、昨十九日黒川左中殿於御宅加藤正三郎殿御立合左中殿被申渡候、依之申上候、已上

十二月廿日

御中間頭
矢村斧右衛門

(朱書)
「四百八十三」

安政五年六月ヨリ

御養君様被 仰付候ニ付年番ニ而取調候書類

一、今日堀田備中守殿・遠藤但馬守殿 御養君様御用掛り被蒙

仰候ニ付、御風聴歛御断之旨菅野一郎相達ス

六月朔日

御中間頭
御小人頭

組之者前々西丸向相勤候節之定人数并、嘉永六丑年 御本丸江御移徙之節御供被 召連当時打込相勤居候者姓名共、美濃紙 縦帳ニ相認メ明後日迄自分共江可差出候事

六月六日

津田半三郎
駒井左京

御中間頭

小野悦之進

矢村斧右衛門 組

伊藤新之助

西丸御中間役々定人数并打込勤之者姓名帳

(朱書)

「此帳面掛り御目付衆より達ニ付美濃紙豎紙ニ相認メ
六月八日掛り御用所高崎新作江相渡」

小野悦之進
矢村斧右衛門組
伊藤新之助

西丸勤役々定人数

御中間目付

拾八人
内

小野悦之進組 五人
矢村斧右衛門組 八人
伊藤新之助組 五人

御持鎗之者

拾三人
内

小野悦之進組 四人
矢村斧右衛門組 六人
伊藤新之助組 三人

御納戸口前御門番

六人
内

小野悦之進組 式人
矢村斧右衛門組 式人
伊藤新之助組 式人

御台所口前御門番

六人
内

三組 式人ツ、

奥表仕切土戸番

六人
内

御広敷御長屋御門番

六人
内

小野悦之進組 式人
矢村斧右衛門組 三人
伊藤新之助組 式人

大奥裏締戸番

六人
内

小野悦之進組 式人
矢村斧右衛門組 三人
伊藤新之助組 式人

野方御使之者

九人
内

小野悦之進組 三人
矢村斧右衛門組 四人
伊藤新之助組 式人

昼番御用除之者

人数不定
当时

三組 式人ツ、

御長屋御門番之儀者
御本丸より兼勤仕候
間相除申候

外見習勤之者
小野悦之進組筋

嘉永度
松永定作組 四人

嘉永六丑年九月 御移徙之節 西丸より
御本丸江御供之者役々姓名

御本丸定人数江繰込

安政三辰年六月役儀差免

御本丸定人数江繰込

嘉永七寅年十一月病氣ニ付役儀差免

御本丸定人数江繰込

安政三辰年四月役儀差免

御本丸定人数江繰込

安政四巳年七月二丸御台所脇御長屋御門番申渡

同断

御本丸定人数江繰込

安政三辰年三月病氣ニ付退役

小野悦之進組

御中間目付

加藤熊蔵

宝田富太郎

矢村斧右衛門組

同断

石掛清五郎

岡部豊太郎

池谷金次郎

津岡豊之助

伊藤新之助組

同断

千田祐三郎

関口酉之助

小野悦之進組

御持鎗之者

中山七右衛門

林 権兵衛

山本与十郎

尾関貞三郎

同断

鳥飼万七

今井善右衛門

真壁銀之助

川野和太郎

神谷富次郎

安政四巳年四月大奥御台所口前御門番申渡

御本丸定人数江繰込

当時 御本丸打込ニ而相勤罷在候

当時 御本丸打込ニ而相勤罷在候

安政二卯年七月大奥塀仕切土戸番申渡

安政四巳年八月病氣ニ付退役

安政三辰年三月御簾指之者申渡

当時 御本丸打込ニ而相勤罷在候

嘉永七寅年十二月病氣ニ付隠居仕候

安政四巳年四月触番之者申渡

嘉永五子年十一月病氣ニ付退役

御本丸定人数江繰込

御本丸定人数江繰込

御本丸定人数江繰込

伊藤新之助組

同断

藤原勝之助

田口己之助

清水吾八

小野悦之進組

御広敷御長屋御門番

萩原林左衛門

伊久間彦太郎

矢村斧右衛門組

同断

野口市次郎

村川助太郎

松本常次郎

伊藤新之助組

同断

真壁文蔵

小野悦之進組

大奥裏締戸番

鈴木多喜三郎

高橋喜三郎

矢村斧右衛門組

同断

村川幾之助

関根三郎左衛門

河野政次郎

伊藤新之助組

同断

清水米吉

小野悦之進組

野方御使之者

藤村清太郎

当午二月病氣ニ付退役

脇坂鍊五郎

一、御貝役

老

一、押太鞍役

老

御本丸定人数江繰込

園田弥八郎

一、御徒目付

四人

一、御徒押

式人

矢村斧右衛門組
同断

一、御中間頭

老

一、御小人頭

老

御本丸定人数江繰込

八木田茂吉

一、御駕籠之者頭

老

一、御小人目付

四人

鳥飼文五郎

一、御小人押

四人

一、御草履取

式人

安政三辰年正月西丸御納戸口前申渡

西村彦太郎

一、御駕籠之者

拾六人

一、御長刀

老振り

伊藤新之助組
同断

一、御直鎗

式筋

一、御鑊鎗

老筋

御本丸定人数江繰込

丸山房次郎

一、御十文字鎗

老筋

一、御拋鎗

老筋

安政四巳年十二月病氣ニ付退役

井上又八

一、御貝挟箱

老

一、御玉箱

老

右之通御座候、已上

御中間頭

一、御挟箱

四走

一、御台傘

老

午六月

小野悦之進

一、御日傘

老

一、御雨傘

老

矢村斧右衛門
伊藤新之助

一、御曲録

老脚

一、御床机

老脚

来ル十八日 御養君様被 仰出有之、同廿一日頃紅葉山 御宮

并惣 御靈屋江 御轅ニ而 御同参可被遊積内々田中勘左衛

門より御中間頭・御小人頭江達有之、右ニ付御人御差支無之哉

之旨尋ニ付、如何様ニも差繰御間ニ合セ可申旨申聞置候

一、右ニ付中小着物請取之儀も同人江相咄し候処、御細工所・御納

戸江も談置可申間、員数可申聞旨ニ付明日遣可申積談置申候

六月十三日

六月

津田半三郎
駒井左京

御徒目付組頭江

御徒目付組頭江

出火之節御供

一、御目付 老

御養君様御附不被 仰付以前 御城内 御成御雇左之通

右者 御本丸御目付当時御用相嵩、日々御役当多手明之者無御座候間、御附不被 仰付已前ニ茂西丸御目付老人ツ、相詰御供番相心得、尤泊り者不仕心得ニ罷在、差掛り 御成被 仰出候節 公方様御供者是迄加泊り御目付相心得候間 御養君様御供之分者西丸御目付加泊り之者相心得

一、新御番 組頭老人 但番人数組頭老人・御番衆拾人

御番衆六人 内御番衆拾人者朝より罷出、残り之分拾人者泊りニ罷出

右之通御供相心得可申哉、尤 御二方様被為 成候得者組頭

公方様之方江罷出候ニ付組頭老人不足仕候間 御養君様御供之方

江者御番衆計七人御供被 仰付可然奉存候

但新御番人数之儀者当時惣組ニ而拾人減相成候ニ付、他向より

介取相勤候

一、小十人組 組頭老人 但番人数組頭老人・御番衆拾人

御番衆三人 内組頭老人・御番衆拾人者朝より罷出、残り之分拾人

泊りニ罷出候

右之通相心得可申哉、尤 御二方様被為 成候得者組頭昼之内

不足仕候間、組頭式人者昼夜詰切候様被 仰付可然哉奉存候、

御番衆之儀ハ 御二方様御供ニ罷出候而も当番四人相残り候

間、夕出之者朝より詰切候ニ者及申間敷哉ニ奉存候

一、御馬乗 老人 一、御馬 老疋

右者蓮池御厩江増泊り仕候様可仕候哉

一、御数寄屋坊主 老人

右者平常九人泊り仕候 公方様 御成人數之内より老人罷出

候間 御養君様御供も当番人数之内より相心得候様可仕候

一、御徒目付 式人

右平常六人泊り仕候 公方様 御成御供人数之内より式人罷

出候 御養君様御供之方者御本丸御徒目付老人、西丸御徒目付

老人日々御供相心得罷在、差掛り 御成被 仰出候節者西丸

御徒目付当番之内より式人御供之方江罷出可申候

一、御中間頭之内 老人

御小人頭

右者日々御中間頭老人・御小人頭老人相詰罷在候内、老人

公方様御供仕候、左候而も老人相残候間、残之者 御養君様御

供仕候様相心得可申候、尤夜中者御供不仕候

但夜中者組頭老人泊り仕 公方様御供相心得罷在候間 御

養君様御供之方者別段老人増泊可致候

一、御駕籠之者頭 老人

右者日々老人ツ、相詰 公方様御供相心得罷在候 御養君様

御供之方者非番之御駕籠之者頭相心得罷在、且差掛り 御成被

仰出候節者御駕籠之者組頭御供仕候様可致候

但夜中 御成御座候得者前々より御駕籠之者頭御供罷出不申

候ニ付、夜中者 公方様御供之方者泊り之組頭老人増泊可致候

一、御小人目付 三人

右者平常八人泊仕候 公方様 御成御供人数之内ニ而三人罷

出、其外 御成御用ニ而罷出候ニ付 御養君様御供不足仕候

間、御本丸御小人目付式人、西丸御小人目付当番之内より式人

并二丸当番之内より老人、御供之方江罷出候様可致候

一、御草履取 壹人 一、御持鎗之者 三人
一、御長刀役 壹人 一、御小道具之者 九人
一、御使之者 五人 一、御駕籠之者 拾人

右者 公方様御供之振合ヲ以書面之通増泊可致候
一、御露路之者 六人
右者平常拾五人泊り仕候 公方様 御成御供右人数之内より
六人罷出候間 御養君様御供も泊り人数之内ニ而相心得候様可
仕候哉

右之通伺相済候間此段申達候事

六月

津田半三郎
駒井左京

御養君様御用掛り

久世大和守

右於奥相済

六月廿三日

但馬守殿

伯耆守殿

明廿五日 御本丸・西丸 殿中染帷子麻上下着用、五ツ半時揃

二候

六月廿四日

御同人

同人

御三家
庶流
溜詰
牧野備前守
酒井若狭守

右之面々明廿五日染帷子麻上下着用登 城候様可被達候
六月廿四日
御役替
松平越前守
御譜代大名同嫡子
高家
雁之間詰同嫡子
御奏者番同嫡子
菊之間縁頼詰同嫡子
布衣以上御役人

御小性組番頭格 御養君様御附奥勤

西丸御留守居
戸川播摩守

宰相様御附若年寄被 仰付

牧野遠江守
稻垣安芸守

但馬守殿

与右衛門殿

紀伊宰相様御事 御養君様と被 仰出候

右之段今日出仕無之向々江可被相達候

六月廿五日

御同人

同人

御養君様御事 宰相様と奉称候

御殿西丸江被 仰出、当分 御本丸ニ 御逗留被遊候

右之通可被相触候

大和守殿

与右衛門殿

御養君様御附之者被 仰付以前者、御供其外非常心付方等之儀

諸事 御本丸ニ而相心得可申候、追々御附被 仰付候共追而
達候迄者諸向共都而打込相勤差支不相成様可取計候、尤西丸
御殿勤番等之儀も先是迄之通可被心得候
右之趣向々江可被相触候

六月廿五日

一、宰相様御供扣相心得候者中小合式拾六人、今廿五日夕御台所御
夜食共・明廿六日より朝夕御夜食共日々被下候様、尤野方御使
者夕計り之積り、御台所断御扣共三通御部屋宗運ヲ以差出ス

但馬守殿

左中殿

御養君様被 仰出候ニ付、未年始ニ不罷出候共初而 御目見相
濟候面々者御礼可罷出候
右之通可被相触候

六月廿五日

御同人

同人

御養君様 御本丸 御逗留中者、御祝儀事等於 御本丸中務
太輔謁候、同人登 城無之節者月番之老中謁候事
右之趣向々江可被相達候

六月廿五日

御同人

同人

今日 御養君被 仰出候為御祝儀、明廿六日染帷子麻上下着用

五半時惣出仕、尤為御祝儀各々罷越候儀者追而可相達候

但宰相様江之御祝儀者、於 御本丸中務太輔ニ謁候様可仕候

一、在国在邑之面々拾万石以上者使礼、其已下者可為飛札候

但隱居・幼少・病氣之面々者月番之老中中務太輔宅江以使者

御祝儀可申上候、在邑之隱居・部屋住者可為飛札候

右之通可被相触候

六月廿五日

宰相様江被為附

宰相様御附若年寄衆

同御側衆

右於 御前被 仰付之

宰相様御附御小性組番頭格奥御奉公

同御小性

同御小納戸

同御小納戸

御伽

脇坂中務太輔

御奏者番

牧野遠江守

稻垣安芸守

御留守居

堀田土佐守

大御番頭

大久保因幡守

家老

村松郷右衛門

用人

菊地角右衛門

小性頭取

石川善左衛門

野村貫一郎

小納戸頭取

森 求馬

小納戸

大久保又蔵

関口雄助

伽

又蔵倅

大久保衛次郎

御附 奥医師 三上快庵

右於奥相濟

六月廿五日

一、明後廿八日紅葉山 御宮 御同參御沙汰止之旨、当番所又五郎相達ス

六月廿六日

(朱書) 「臨時」 来ル 日紅葉山 江 御參詣之節御中間・御小人着物 御納戸江御断

覚

津田半三郎 駒井左京

一、染帷子 三十一
御中間御供組頭 一人
御使組頭 一人
亀井坊 一人
御日傘役 一人
御參内傘持 一人
御草履取役 一人
御先練 一人
御中間合 一人
御小人 一人
式拾式人

一、素袍襠繻子脚絆 一具

亀井坊 一人

一、麻上下 式具

御日傘役 一人
御草履取役 一人

右者 日紅葉山 御宮并惣 御靈屋江 御參詣之節為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉願候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

午六月

御中間頭 御小人頭

(朱書) 「臨時」 来ル 日紅葉山 江 御參詣之節御中間・御小人着物 御細工所江御断

覚

津田半三郎 駒井左京

一、茶縮緬袷羽織 三
御中間御供組頭 一人
御使組頭 一人
但紐共

一、黒加賀絹袷羽織 三十七

御中間目付合 一人
御小人目付 一人
御中間押合 一人
御小人押合 一人
御玄關番 一人
式拾式人

一、黒絹単羽織

八十九

御中間
御小人合

八拾九人

右者 日紅葉山 御宮并惣 御靈屋江 御參詣之節為着仕候ニ
付、書面之通請取申度奉願候、御細工所江御断被仰渡可被下候、
以上

午六月

御中間頭
御小人頭

紅葉山江

御養君様

御參詣之節御中間・御小人着物

御納戸江御断

覚

一、染帷子

三十一

御中間御供組頭

御使組頭

御日傘役

御參内傘持

御草履取役

龜井坊代り御長刀役

御先練

御中間合

御小人

式拾式人

御日傘役

御草履取役

壹人

壹人

壹人

一、麻上下

三具

壹人

龜井坊代り御長刀役

壹人

右者 日紅葉山 御宮并惣 御靈屋江 御養君様 御參詣之節
為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御納戸江御断被仰渡可
被下候、已上

午六月

御中間頭
御小人頭

(空白ママ)

日紅葉山江

御養君様

御參詣之節御中間・御小人着物

御細工所江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織

三

御中間御供組頭

御使組頭

御中間目付合

御小人目付合

御中間押合

御小人押合

拾式人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

拾人

一、黒絹単羽織

六十六

右者 日紅葉山 御宮并惣 御靈屋江 御養君様 御參詣之節

為着仕候ニ付、書面之通請取申度奉存候、御細工所江御断被仰渡

可被下候、已上

午六月

御中間頭
御小人頭

例書

天明元丑年閏五月十八日 御養君様被 仰出、同廿一日紅葉山 御宮江 御参詣之節、御供相勤候御中間・御小人江御清服被下置候

午六月

御中間頭
御小人頭

右之通御扣・例書共都合拾三通相認め置候処 御同参御沙汰止之相成候ニ付不用ニ罷成

但馬守殿

金三郎殿

御養君被 仰出候御祝儀御礼被為 請候ニ付、万石以上之面々父子とも無官ニ而も、年始登 城之外并三千石以上之面々公方様 宰相様江以御太刀目録御祝儀可申上候、此外年始・八朔御礼ニ罷出候分可被罷出候、尤染帷子長袴可為着用候

但諸御番方老組より老兩人も可被罷出候

一、病氣・幼少・且隱居之面々者以使者 公方様 宰相様江御太刀目録可差上候

一、在国・在邑之面々者追而 公方様 宰相様江御太刀目録以使者可有献上候

一、宰相様江献上之御太刀目録も 御本丸江可相納候

一、右之節登 城之面々御礼迄 宰相様江之御祝儀者於 御本丸中務太輔謁、夫より掃部頭・老中 御本丸・西丸若年寄江可相

廻候、且病氣・幼少・隱居之面々者月番之老中中務太輔江使者可被差越候

一、在国・在邑之面々者飛札可差越候、尤掃部頭・中務太輔江以拾通可申越候

一、在国・在所之隱居・幼少・部屋住之面々も可為同断候

但御番方者頭宅江可罷越候

右之通可被相触候、日限之儀者追而可相達候

六月

御同人

同人

御養君様被 仰出候ニ付、西丸諸御礼且又諸献上物并年始・八朔・五節句・月並出仕等其外諸事前々之通ニ候、尤此度者御本丸ニ御逗留之事ニ候間、追而西丸江 御移徙被為 在候迄者諸事 御本丸ニ而被為 請候、且又献上物之儀者此度 御養君様被 仰出候御祝儀之御礼相濟候而より献上之積可被達置候

六月

但馬守殿

左中殿

来月二日 御養君様被 仰出候御祝儀御礼被為 請候間、出仕并為御祝儀相廻候儀先達而相達候通り可被心得候

一、五ツ半時揃ニ候事

一、御台様 本寿院様江差上もの、来月二日朝六ツ時より五時迄之内可被差上候

右之通可被相触候

六月廿八日

御徒目付組頭
火之番組頭 江

御養君様被 仰出候御祝儀御礼被為 請候ニ付、明二日登城
之面々御礼相濟、夫より掃部頭・御老中方 御本丸 西丸若年
寄衆 江廻勤有之候ニ付、外桜田御門・馬場先御門・和田倉御門
右三ヶ所御門外下馬所ニ相成申候

右者 諸事前之三ヶ所下馬所ニ相成候節之通可被心得候事

七月朔日

津田半三郎
駒井左京

越中守殿

御台所 江御断

月番 市橋伝七郎
黒川左中

覚

御中間合
御小人 式拾六人
内野方御使三人
御駕籠之者 拾人

右者 宰相様為御供扣日々罷出候間、昨廿五日夜御台所より朝
夕御夜食共、野方御使三人分者日々夕御台所計被下候様御賄方
江御断被仰渡可被下候、已上

午六月

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

右御扣共三通六月廿五日御部屋宗運ヲ以差出ス

但馬守殿

左中殿

宰相様 江 御名 家茂公与 御改被 進候旨被 仰出候

一、右ニ付御祝儀献上物等不及候

右之趣向々 江可被達候

七月廿二日

越中守殿

次郎兵衛殿

宰相様御事 御殿西丸ニ被 仰出、当分 御本丸ニ御逗留被遊

候旨先達而相達置候得共、其儘直ニ 御本丸ニ被成御座候

右之通可被相触候

八月八日

越中守殿

正三郎殿

宰相様御若年被成御座候間 御政事向之儀当分之内田安中納言
殿御後見被成様との 御遺言候、何れも入念大切ニ可相勤旨被
仰置候

右之通被仰出候間向々 江可相触候

八月八日

御同人

同人

宰相様御事今日より 上様与奉称候、弥以精勤を励可申旨被
仰出候段、今日出仕無之面々 江者同席之面々より達候様可被
達候

八月九日

八月十七日半三郎殿被遣

御徒目付組頭_江

御養君様被 仰出候節 御城内外 御成_并非常御供之儀、此度

御出棺相濟候上_者前々之通相心得候様但馬守殿_江申上候、此
段為心得申達候事

八月

津田半三郎
駒井左京

「四百六十三」挿入図

